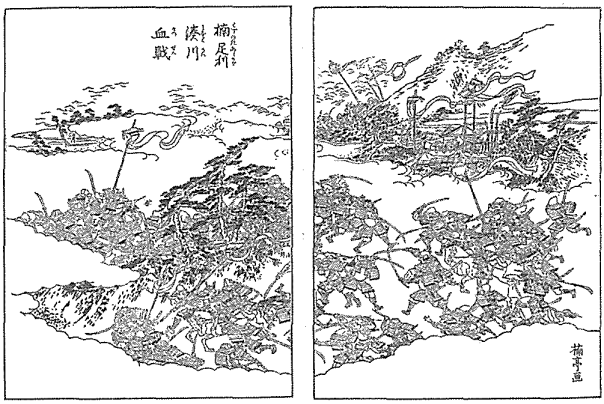
第八章　南北朝の動乱と室町幕府



湊川合戦（『摂津名所図会』）

第一節　鎌倉幕府の滅亡・南北朝内乱期の神戸

第二節　細川氏と赤松氏

第一節　鎌倉幕府の滅亡・南北朝内乱期の神戸

1　赤松氏の挙兵

後醍醐天皇の倒幕挙兵

文永九年（一二七二）に死去した後嵯峨上皇には皇統後継者となるべき二人の子がいた。久仁親王（後深草天皇）、恒仁親王（亀山天皇）の兄弟である。しかし、後嵯峨上皇は皇位継承者を一人に絞らないまま死去し、皇統は兄後深草の持明院統、弟亀山の大覚寺統の両統に分裂した。そもそも後嵯峨天皇自身が鎌倉幕府の強い働きかけで皇位についたという事情もあり、後継者の決定は幕府に委ねられたのであった。ところが幕府は皇位継承について明確なルールを打ち出すことなく、時々の情勢により両統からほぼ交替で天皇を即位させた。その結果、かえって両統の争いは激化することになった。両統の争いが深まる中で、両統の分裂を支えている幕府を滅ぼして皇統を統一すべし、という路線が浮上してくる。この路線をとって倒幕を目指したのが後醍醐天皇であった。

正中元年（一三二四）後醍醐天皇の倒幕計画は露見する。窮地に追い込まれた天皇は、なんとか幕府の追及を逃れた。しかし、元弘元年（一三三一）幕府に計画が再び発覚すると、天皇は京都を脱出して山城国

写真79　後醍醐天皇像（清浄光寺蔵）

笠置山（京都府笠置町）に立て籠もった。また、河内国では楠木正成が赤坂城（大阪府千早赤阪村）に拠って倒幕の兵を挙げた。

これに対し鎌倉幕府は京都の六波羅探題を中心に後醍醐天皇側を攻撃し、笠置山と赤坂城を攻め落とした。捕えられた後醍醐は隠岐島に流されたが、息子の護良親王と楠木正成は、捕えられることなく戦場から脱出して行方をくらました。

元弘二年（正慶元年）十二月、楠木正成が再び河内国で蜂起する。正成は千早城（大阪府千早赤阪村）に拠り、赤坂城には平野将監入道を据えて幕府の大軍を迎え撃った。『太平記』（以下『太平記』は日本古典文学大系を用いる）によると、赤坂城は播磨国の武士、吉河八郎が提案した、城の水源を絶つ作戦によって落城した（巻第十八）。

一方、千早城はなかなか落ちなかった。正成が知恵の限りを尽くして、城を包囲する幕府の大軍を苦しめたことは、『太平記』に克明に描かれており、よく知られた話である。しかし、千早城は正成の策略によってのみ持ちこたえたのではなかった。これも『太平記』に記されていることであるが、千早城の背後では吉野に潜伏していた護良親王が幕府軍の補給路を断つなど、長い合戦に疲れた幕府軍を攪乱する活動を展開していたのである（巻第七）。城を包囲する幕府軍は背後から切り崩され、次第に戦意を喪失していった。

護良親王の活動　その一方で、護良親王は倒幕の兵を挙げるよう命じる令旨を、各地の武士にさかんに送った。その一通が播磨国の佐用荘（宍粟市・上郡町周辺）を本拠とする赤松円心の手にもたらされたのである。『太平記』によると赤松円心の息子則祐は、護良親王が尊雲法親王と呼ばれた僧侶時代から親王に近仕した僧侶で、則祐の手によって倒幕を命じる令旨が円心に届けられたという（巻第六）。

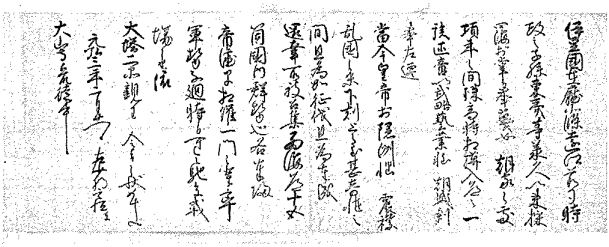


写真80　護良親王令旨（太山寺文書）

則祐が親王に近仕したことは『太平記』以外に所見がなく、確かなことはわからない。しかし、円心の挙兵に親王が関わっていたことはまちがいない。それは、円心の挙兵に合流した武士の軍忠状から明らかである。軍忠状とは、合戦に参加した武士や僧侶が合戦の功績を書き上げ、大将や合戦の奉行から功績を認めるサイン（証判）を書き入れてもらい、後日恩賞を得るための証拠とした文書のことである。

安芸国の武士葉山城頼連は、円心が苔縄城（上郡町）で挙兵した当初に合流した。彼の残した軍忠状の一部を次に引用しよう（『県史』九「毛利家文書」三）。

最初より御方に馳せ参ぜしめ、殿法印御坊の御手において、播磨国苔縄に城を構え、去る二月廿六日に、高田城に押し寄せ、南角の矢倉を破却せしめ、身命を捨てて城内に責め入り、軍忠を抽んず

右の軍忠状によると、頼連は苔縄城の円心軍に合流したとき、「殿法印」という人物の指揮下に入っている。この時代、倒幕軍の指揮官を務めることができる「殿法印」といえば、護良親王の側近中の側近、殿法印良忠をおいていない。挙兵の時点より円心の陣中には、護良親王の直臣が「お目付役」として送り込まれていたのである。円心挙兵の背景には、彼らがもたらした河内の楠木氏挙兵の情報や、彼らによる説得があったと考えてもよいだろう。

円心の摩耶進軍　円心は佐用荘の南にあった高田城を攻め落とした後、六波羅攻撃のため東進し、『太平記』によれば「兵庫ノ北ニ当テ、摩耶ト云山寺ノ有ケルニ、先城郭ヲ構」て（巻第七）、攻め寄せた六波羅軍をさんざんに打ち破ったという（巻第八）。この勝利を足がかりに、円心は京都に進軍するのである。この時摩耶山の城に拠った赤松勢の中には、太山寺（西区伊川谷町）の衆徒たちも混じっていた。「太山寺文書」から、衆徒たちの動きを追跡してみよう。

まず注目されるのは、元弘三年（一三三三）二月二十一日付の倒幕挙兵を命じる護良親王の令旨（写真80）である。この令旨に副えられた別紙（礼紙書）には「今月廿五日寅一点、軍勢を率いて、当国赤松城に馳せ参らしむべし」とあり、令旨を受け取った太山寺は二月二十五日に赤松城に軍勢を派遣したことがわかる。先に紹介した葉山城頼連の軍忠状によれば、この日は赤松勢が高田城を攻撃する前日にあたっていた。

赤松城については後に述べるように、灘区に故地を求める見解もあるが、太山寺衆徒が「当国赤松城」と述べていることから、赤松城は太山寺と同じ播磨国にあったと考えるべきである。当時播磨国で「赤松」を称する城となれば、この時円心が拠点とした苔縄城をおいてほかにないであろう。

以上をまとめると、この令旨は二月二十一日に作成され、二十五日以前に太山寺にもたらされ、二十五日には太山寺の軍勢が赤松城（苔縄城）に到着したということになる。これらの日付を信用するならば、かなりの短時間で令旨の効果があらわれたといえる。

次に、太山寺が赤松円心に提出した軍忠状（『県史』二「太山寺文書」二一、写真81）から、赤松勢と太山寺衆徒（しゅと）等のその後の行動を追ってみよう（便宜上（ア）～（ケ）の記号を付した）。

「一見しおわんぬ（赤松円心）（花押）」

注進

（ア）大塔二品親王の令旨を賜るにより、播磨国大山寺衆徒等、去る閏（うるう）二月十五日より合戦の忠をいたし、御祈禱の実を抽ずる事、

（イ）一、当寺長日不断薬師如来供養法

（ウ）一、摂州小平野兵庫嶋合戦後二月十五日　初度

（エ）一、同廿三日尼崎合戦手負実名時教大輔

（オ）一、同廿四日同国坂部村合戦打死刑部次郎実名安重

（カ）一、摩耶山合戦三月一日打死兵衛三郎実名友重

（キ）一、京都合戦同十二日打死大夫房大将実名源真・肥後

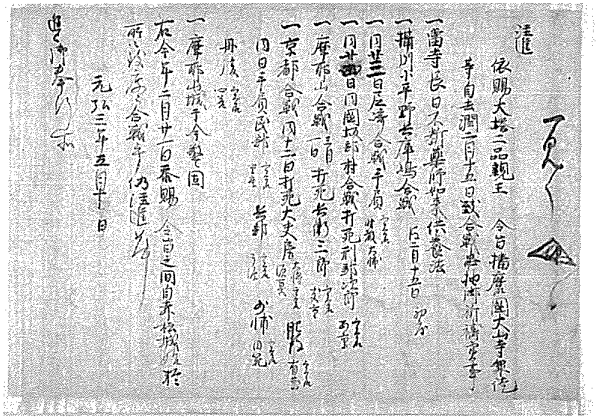


写真81　太山寺衆徒軍忠状（太山寺文書）

有慶実名、同日手負民部重舜実名・兵部了源実名・少輔円範実名・丹後心善実名

（ク）一、摩耶山城今に警固す

（ケ）右今年二月廿一日忝なくも令旨を賜るの間、赤松城より始め、所々において度々合戦をいたしおわんぬ、よって注進件の如し、

元弘三年五月十日

進上す御奉行所

これによると、太山寺は先ほどふれた二月二十一日付の護良親王令旨を受け取った後、赤松城に軍勢を派遣した（ケ）。その後、閏二月十五日より親王の勝利を祈る祈禱（ア）を始めるとともに、同日小平野・兵庫嶋（ともに兵庫区）の合戦に参戦した（ウ）。この合戦に赤松勢は勝利したらしく、合戦の場は尼崎、坂部村（ともに尼崎市）に移る（エ・オ）。

しかし、三月一日には再び神戸が戦場となり、摩耶山で合戦があった（カ）。『太平記』によると、赤松勢は摩耶山の城を出て尼崎方面に陣を取ったが、六波羅を応援する四国勢が尼崎に上陸したため、一時進軍が止まったとしている（巻第八）。再び神戸に戦場が押し戻された背景には、このような事情があったのかもしれない。

その後、円心が京都に攻め入った（キ）後も摩耶山は赤松勢の勢力下におかれ、太山寺衆徒もその維持の一翼を担った（ク）。西播磨から京都に軍を進める赤松氏にとって、摩耶山と兵庫は「生命線」としての意味を持ったのであろう。

赤松城・摩耶山城　先に述べたように、赤松城は西播磨にあったと考えられる。しかし、現在の神戸大学六甲台キャンパス付近を赤松城とする説がある。なぜ、このような説がとなえられるようになったのだろうか。赤松城が灘区にあったことを論じた古い考察として興味深いのは、『西摂大観』の「武庫郡東部」第六「古城址及古戦場」のなかに収められた「摩耶城」「赤松城」の記述である。『西摂大観』は三宮の印刷会社明輝社が創業二十周年を記念して、明治四十四年（一九一一）に発刊した西摂津の史誌である。

『西摂大観』の両城に関する記述は複雑なので、以下詳しく紹介しておこう。『西摂大観』は、第一に『太平記』の記述を基本とし、それに合致する場所を探し出すという方法をとっている。『西摂大観』によれば、これ以前に摩耶城が比定されていたのは、西灘村のうち、上野村（灘区）の北の山であったという。しかし、同地は眺望の点では城として申し分ないが、『太平記』がいうように五百人の兵を置くだけの広さをもたないし、六波羅勢が「摩耶の城の南の麓、求塚・八幡林より」攻撃をしかけたという記述にも疑問があるとする。「求塚」（灘区都通）・「八幡林」（同八幡町、現在の六甲八幡神社付近）は摩耶から東にずれるからである。こうして『西摂大観』は、摩耶城のほかに、兵を置く広さをもち、「求塚・八幡林」の北にあたる城があったと考えるのである。

そして、この城の所在地として浮かび上がってきたのが、高羽村（灘区）のうち現在の神戸大学六甲台キャンパス付近であった。明治四十一年五月の史談会会員村上五郎（鳩翁）の踏査に拠れば、同地には城跡と目される石垣、井戸等の遺構が残っていたという。さらに、付近には「戦場が谷」という地名も残り、求女塚・八幡林の北という『太平記』が描く立地条件にも当てはまる。これをもって『西摂大観』は「太山寺文書」

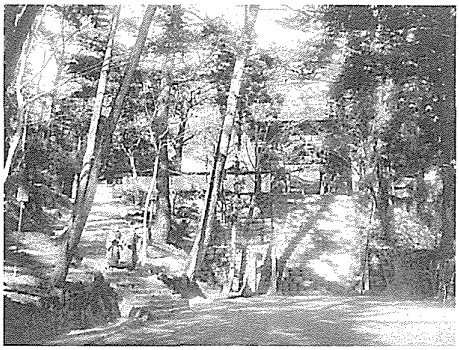


写真82　明治期の十善寺（『御影の里』より転載）

にあらわれる「赤松城」は西播磨ではなく、高羽村にあったとするのである（後に述べるように、このような判断には問題がある）。

それでは、同書は摩耶城と赤松城の関係をどう考えているのであろうか。ここからが難解なところであるが、同書は上野村の摩耶城を「一望台」、つまり見張り台であるとし、赤松勢が六波羅軍と衝突し、これを壊滅させたのは、摩耶城ではなく高羽村の十善寺寺域内の赤松城での合戦であった、と結論づけるのである。

こうして、『西摂大観』は『太平記』から出発しながらも、摩耶、赤松の二つの城が神戸にあったという、『太平記』とは全く異なる見解に到達したのである。

赤松城はあったのか

しかし、赤松城に関する『西摂大観』の指摘は、大きな難点をかかえている。以下、川辺賢武の説によりながら、赤松城を高羽村に求める説の難点を整理していこう。

まず、先にも述べたように、「太山寺文書」には「当国赤松城」とあり、同城は太山寺と同じ播磨国にあったと考えるべきである。

また、石垣や井戸跡をただちにこの時代の城の遺構とするのも難点がある。明治四十一年（一九〇八）当時の遺構の状態がどのようなものであったのか不明ではあるが、鎌倉・南北朝期の城郭が石垣を伴うような

整ったものではなかったこと、なおさら急ごしらえであったことを考えると、これらの遺構が十四世紀の城の遺構であったとすることはできないだろう。おそらく、村上が見出した石垣等は、寺院の遺構と考えるのが妥当ではないだろうか。

こうしてみると、太山寺衆徒が合流した赤松城は、やはり赤松氏の拠点苔縄城であったと考えるべきである。高羽村には「赤松城」という名称で呼ばれる城は存在しなかった。

摩耶城はどこか

それでは残った摩耶城はどこにあったのであろうか。『太平記』のうち、城の位置を考える上で参考になる記述は、①城は「兵庫ノ北ニ当テ、摩耶ト云山寺」に設けられたこと、②六波羅軍は「摩耶ノ城ノ南ノ麓、求塚・八幡林ヨリ」攻撃をしかけたこと、等である。

しかし、摩耶山を「兵庫ノ北」といったり、摩耶山の南の麓を求女塚・八幡林とするのは、地理的にはかなり無理がある。摩耶山は兵庫の北から見れば東にずれるし、求女塚・八幡林から見れば西にずれる。こうしてみると、摩耶山を離れた場所に城を想定したくもなるのであるが、より根本的な問題は『太平記』の地名をどれほどまでに厳密に解釈すべきか、という点にある。

例えば後に述べるように、かの湊川合戦は湊川から神戸、脇浜にかけての広い範囲で戦われており、事実からすれば「湊川合戦」という名称は正確ではない。しかし、それを誤りだとはいえないだろう。例えば、

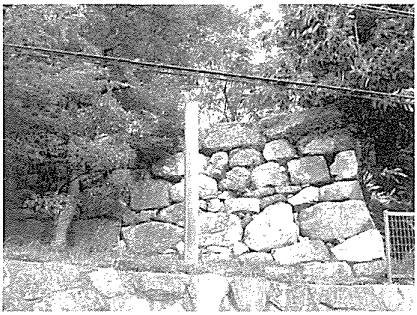


写真83　神戸大学校内伝赤松城跡（灘区）

湊川宿がその地域で一番名が通っているとか、生き延びた新田義貞よりも戦死した楠木正成を中心に合戦をとらえて、彼が戦った湊川を合戦名にするとか、『太平記』はその時代ならではの感覚で地域をとらえていると考えるべきであろう。

幕府軍が「摩耶城」を攻めるために、求女塚、八幡林から北上し西に向かったと考えれば、「摩耶城」を求女塚、八幡林の真北に想定する必要もない。また、後に述べるように、足利兄弟が兵庫に敗退したとき、足利勢の中で兄弟の居所を摩耶城にするか兵庫にするかという議論が行われている。つまり、摩耶城と兵庫は一つのまとまりのあるエリアとして考えられていたのであり、この一つのエリアの中で摩耶城を「兵庫ノ北」と語ることは、決して不自然ではない。

写真84　六甲八幡神社（灘区）

このように考えたとき、「兵庫ノ北」や「南ノ麓、求塚・八幡林」という記述にいちいち引きずられず、「太山寺文書」にも残された「摩耶山城」という表現にしたがって、城の位置を想定するのが、もっとも妥当であると思われる。摩耶山の山寺（『太平記』）といえば、やはり天上寺を想定すべきではないだろうか。従来から指摘されているように、天上寺の子院は山上から山裾に広がっていたと考えられ、それらが城郭として利用されたのであろう。急ごしらえの城なら、寺院を要塞化する方法がもっとも合理的であっただろう。

2　南北朝内乱はじまる

建武新政の成立

元弘三年（正慶二・一三三三）五月、赤松勢は鎌倉幕府を見限った足利尊氏らの軍とともに、六波羅探題を滅ぼした。また、護良親王から倒幕の令旨を受け取り千早城攻撃から離脱し、本拠地上野国新田荘に戻った新田義貞は倒幕の兵を起こして、関東の武士を糾合し、同月鎌倉幕府を滅ぼした。

こうして、隠岐島から帰京した後醍醐天皇を中心とした建武新政が発足する。この新政権にとって、最大の課題は恩賞問題であった。武士たちは必ずしも天皇に忠節を尽くすために幕府軍と戦ったわけではなかったから、彼らの要望にあう恩賞授与が行われなければ、新政権から離脱しかねなかった。

そして、まさに赤松円心こそ、新政権に恨みをもつ武将の最たる者であった。赤松氏はほとんど無名ともいえる家柄ながら、六波羅攻略という大きな仕事をなし遂げたが、本国播磨国の守護職は新田義貞、摂津国の守護職は楠木正成に与えられ、佐用荘一荘を与えられたのみであったという。

通説では、赤松氏が恩賞から漏れたのは、護良親王との関係が災いしたといわれている。護良親王と赤松氏の関係については先にふれたが、南北

写真85　赤松円心木像（宝林寺蔵）

朝分裂後も円心の息子則祐が、護良親王の息子興良親王を担いだことがあるように、両者の関係はかなり深かった。

護良親王は倒幕戦での実績により、自身を征夷大将軍に任じることを後醍醐天皇に求め、同じく将軍の地位をねらう足利尊氏と対立した。親王は新政権のもとでの軍事指揮権を掌握することを希望していたのである。しかし、天皇は軍事指揮権を天皇自身が独占する構想を持っており、護良親王に軍事指揮権を委ねる意志はなかった。こうして両者は建武新政発足当初より対立関係にあった。赤松氏はこの対立関係に巻き込まれ、天皇から冷遇されたのであった。

足利尊氏の離反

建武二年（一三三五）、北条高時の遺児北条時行が関東で蜂起し、足利直義が駐在していた鎌倉を占拠した（中先代の乱）。後醍醐天皇は鎮圧軍として足利尊氏を派遣したが、尊氏・直義は北条氏を破った後、建武政権から離反する姿勢を明らかにし、独自に恩賞を武士たちに与え始めた。例えば、尊氏は三浦高継に勲功の賞として摂津国都賀荘（灘区）等を安堵している（『県史』九「宇都宮文書」一）。

足利勢は後醍醐天皇が派遣した新田義貞を中心とする追討軍を箱根で破って西に進み、京都に攻め入った。京都での合戦は、当初後醍醐側が劣勢であったが、奥州から北畠顕家の援軍が到着すると形勢は逆転した。以下、この間の経緯を詳しく記す『梅松論』（寛正本）によりながら、戦

写真86　現在の都賀川流域の風景（灘区）

局の推移を追ってみよう。

足利勢兵庫からの退却　京都での合戦を不利と見た尊氏・直義は、京都を脱出して丹波路を西に進み、三草山（加東市）から印南野（加古川市・稲美町）に出て、東に転じて兵庫に入った。この時、赤松円心は、兵庫嶋は要害の地ではないから、足利兄弟を円心の厩（摩耶）の城に移し、軍勢はそのまま兵庫に陣を取るという作戦を提案した。

しかし、円心の提案は、尊氏・直義両将が陣中に不在であることが噂になれば、敵は力を得て、味方は力を落とすであろうという「或勇士」の反論によって却下された。その後、周防国の大内氏の援軍を得て、足利勢は摂津国瀬川（箕面市）まで後醍醐軍を押し返すが、戦線は膠着状態となる。

この時、またしても円心が作戦を提案する。その作戦とは、①後醍醐天皇の大覚寺統と対立する持明院統の光厳院から院宣を獲得し、足利勢も「官軍」となること、②いったん西国に退却して形勢を立て直すこと、の二つであった。今度は円心の作戦が採用され、尊氏は院宣獲得の工作をしかけるとともに、兵庫に退却した。一方の直義は、なおも摩耶山の麓に留まって抵抗を続けたが、尊氏の説得で兵庫に移り、大混乱のうちに足利勢は兵庫から海路西へ敗走したのであった。

以上が『梅松論』が記す足利勢退却の顚末であるが、この一連の合戦に足利方として参加した関東の武士、野本朝行が戦場の様子を詳しく記した軍忠状を残している。一人の武士が、戦場でどのような状況に置かれたかを示す興味深い記述があるので、ここで紹介しておきたい（『大日本古文書』「熊谷家文書」二二五）。

朝行は鎌倉から京都に向かう足利勢に従軍して京都に入ったが、翌建武三年（一三三六）二月一日に尊氏

写真87　足利尊氏木像（等持院蔵）

に従って丹波経由で兵庫に退いた。その後十日には西宮、十一日手嶋河原（摂津国瀬川のこと）に押し返し、後醍醐方と交戦している。ところが、手嶋河原で「御宿陣」を取ろうとしていた時、突如兵庫への退却が始まり、朝行も夜間兵庫に退いた。当初、手嶋河原で宿泊する予定が急に変更になったのである。翌日の十二日、直義は摩耶城に向かった。これに従軍した朝行は「皆もって、討ち死にあるべし」という命令が全軍に出ていたことをうけて奮戦したが、夜になって突然兵庫からの退却が始まった。朝行は夜の闇で退却を把握できず、取り残されてしまったという。興味深いのは足利勢の二度の撤退が夜になって突然行われたことである。味方の朝行が気がつかなかったというぐらいであるから、昼にくらべ、夜の撤退は敵に見つかる確率が低かったのであろう。また、撤退が必ずしも全軍に周知されることなく、軍の中枢から突然始まるのも興味深い。朝行ら一般の武士は戦局を全体的に把握することができないまま、戦っていたのであろう。

さて、置き去りにされた朝行はどうしたのであろうか。朝行の弁によれば、東国出身の彼は兵庫近辺について全く不案内であった上、敵の後醍醐勢が接近してきたので、やむなく投降し、京都に引き上げた。そしてまもなく京都を脱出し、東海道をつたって関東へ落ち延び、その後は足利方として関東で戦ったという。

実はこの軍忠状は実際は朝行が書いたものではない。朝行の死によって家督を継ぐことになった子息の鶴

寿丸がしたためたものである。鶴寿丸としては家督を継ぐために、父の軍忠を室町幕府に認めてもらう必要があったのであろう。鶴寿丸は兵庫に残された父が一時後醍醐方についたことを、「不忠の至り」であるけれど仕方がなかったのだ、と弁明している。

湊川合戦前夜

尊氏が九州に敗走した後、播磨国守護の新田義貞は居残った赤松勢に西への進軍をくい止められ、尊氏を追撃することができなかった。一方、尊氏・直義兄弟は、九州最大の後醍醐方の武士菊池氏を多々良浜（福岡市）合戦で破って勢力を回復し、尊氏は海路、直義は陸路で再び京都を目指した。このような事態のなかで義貞は、中国・播磨で赤松勢と戦いながら足利本隊を迎え撃つのは不利であると判断し、摂津国湊川で足利勢を迎え撃つことを朝廷に奏上した。

義貞の提案を受けた朝廷は、新田勢とともに湊川で足利勢を防ぐよう楠木正成に命令した。これに対して正成は、いったん天皇を比叡山に移し、足利勢を京都に誘い込んで包囲する作戦を提案した。しかし、京都を離れることを嫌う貴族らの反対にあい、死を覚悟して湊川に向かったと『太平記』は語っている（巻第十六）。

足利勢の編成

こうして、湊川が決戦の地となった。この合戦の様子を『梅松論』は湊川に攻め込む足利勢の側から、『太平記』は迎え撃つ新田・楠木勢の側から描いている。両書によれば、合戦前夜の両陣の布陣は次のようであったという。

まず『梅松論』によれば、九州から進んだ足利軍は、海路軍は「大倉ノ谷ノ奥」（明石市）に碇を下ろし、陸路軍は一の谷から加古川東岸の印南野にかけての地域にいったん落ち着いた。そしてこの時点で、海陸両

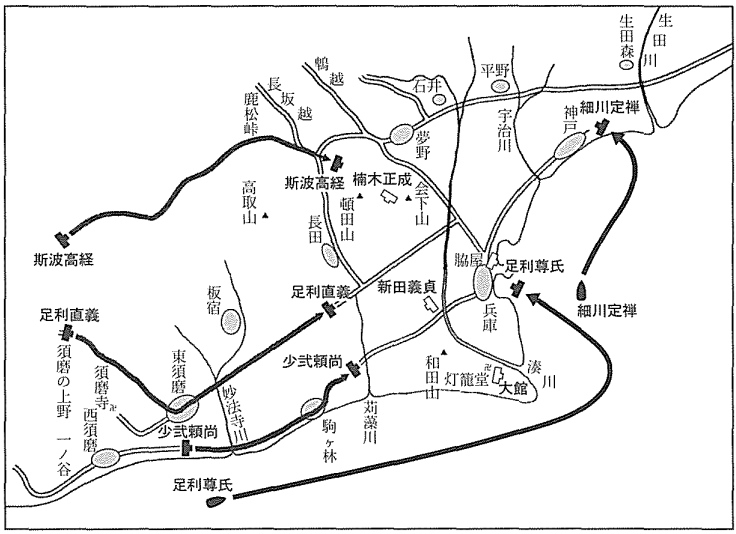


図58　湊川合戦における軍勢の動き（『神戸古今の姿』所収の図を参考に作成）
『太平記』をもとに作成。ただし、足利尊氏の上陸地点、少弐頼尚の進路は『梅松論』で補った。

陣が容易に連絡を取れるようになり、接近した両陣の間で湊川に攻め込む手だてが話し合われた。『梅松論』はこの間の状況を次のように記している。

海陸ノ両御陣見渡シタリシ間、明日廿五日兵庫ノ合戦ノ事御談合ノ御使夜中ノ往復度々ニ及フ、又当所ニヲイテ御手分アリ、大手ハ下御所（直義）、副将軍越後守師泰、大友、三浦介、赤松、播磨美作備前三ヶ国惣軍勢也、山ノ手ノ大将ニハ尾張守殿（斯波高経）、安芸周防長門守護人軍勢、浜ノ手ニハ太宰少弐頼尚一族、分国筑前豊前肥前（中略）薩摩ノ輩、相従テ向フヘキニソ治定セル、

つまり、陸路軍は三手に分かれ、大手軍は直義と関東・中国・播磨勢、山の手軍は斯波高経と中国勢、浜の手軍は少弐頼尚と九州勢によって編成された。山の手軍、浜の手軍という呼称

から考えて、大手軍は山の手軍と浜の手軍の間を進むと考えてよいであろう。

では、この三つの部隊はどのルートを取って後醍醐方に攻撃を仕掛けたのであろうか。そこで注目されるのが、『太平記』（巻第十六）の次の記述である。

去程ニ、明レバ五月二十五日辰刻ニ、澳ノ霞ノ晴間ヨリ、幽ニ見ヘタル舟アリ。（中略）又須磨ノ上野ト鹿松岡、鵯越ノ方ヨリ二引両・四目結・直違・左巴・倚カ、リノ輪違ノ旗、五六百流差連テ、雲霞ノ如ニ寄懸タリ。

これによると、鹿松（長田区鹿松町）、鵯越から攻め込むのが山の手軍、須磨の上野から攻め込むのが大手軍、ということになるだろう。『太平記』は大手軍の直義勢が、楠木勢に圧倒されて「須磨ノ上野」に退却したとしていることも、大手軍の進路を考える上で参考になる。では『梅松論』は、足利勢の進路をどのように説明しているのであろうか。

御方（足利勢）三手ノ勢、山手、須磨口、浜ノ手皆同心ニ向シ、荒磯ノ故ニヤ浜口ノ少弐ノ手勢ノ進タリシ旗ノ下ニハ二千余騎シツ〳〵ト歩セタリ、

右のように、『梅松論』は陸を進む足利勢を、山手、須磨口、浜の手の三隊としている。ここからも大手軍は「須磨口」を経由していたことがわかる。須磨口は『太平記』が記す「須磨ノ上野」と考えてよいであろう。また、『梅松論』には『太平記』にはあらわれない少弐頼尚の率いる浜の手軍が磯伝いに東に進んだことが記されている。

こうして、足利勢は尊氏率いる海路軍と、数隊（『太平記』では二隊、『梅松論』では三隊）に別れた陸路軍と

いう編成で、湊川に攻め込むことになったのである。

後醍醐方の布陣

これを迎え撃つ新田・楠木軍の布陣は、『太平記』によると次のようであったという。

先和田ノ御崎ノ小松原ニ打出テ、閑ニ手分ヲゾシ給ヒケル。一方ニハ脇屋右衛門佐義助ヲ大将トシテ末々ノ一族二十三人、其勢五千余騎経嶋ニゾ磬ヘタル。一方ニハ大館左馬助氏明ヲ大将トシテ、相順フ一族十六人、其勢三千余騎ニテ、燈爐堂ノ南ノ浜ニ磬ラル。一方ニハ楠判官正成態他ノ勢ヲ不レ交シテ七百余騎、湊川ノ西ノ宿ニ磬ヘテ、陸地ノ敵ニ相向フ。左中将義貞ハ総大将ニテヲハスレバ、諸将ノ命ヲ司テ、其勢二万五千余騎、和田御崎ニ帷幕ヲ引セテ磬ヘラル。

新田勢は、義貞の弟義助を大将とする経ヶ島に陣を取る軍、大館左馬助を大将とする燈籠堂の南に陣を取る軍、和田岬に陣を取る大将義貞の本隊の三手に分けられた。つまり新田勢は三手とも、海から上陸する尊氏の本隊を迎え撃つため、浜手に陣を取ったのである。

一方、楠木勢は他勢を交えず「七百余騎、湊川ノ西ノ宿ニ磬ヘテ、陸地ノ敵ニ相向フ」とあり、直義を本隊とする陸路軍に対向する位置に陣を張った。

また、『梅松論』は海の尊氏の視点から陸を眺めて、新田・楠木勢の布陣を次のように描いている。

①敵ハ湊川ノ後ノ山ヨリ里マテ旗ヲ靡シテ楯ヲツキ引ヘタリ、是ハ楠木大夫判官正成トソ聞ヘシ、

②浜ノ手ハ和田ノ見崎ノ小松原ヲ後ニアテ、中黒ノ旗サシテ一万余キモ有ラント見ヘシカハ、三キレニ引ヘタリ、

①によれば、楠木軍が山手に、②によれば新田氏の家紋である大中黒の旗を指した三隊が浜手に陣を敷いていることが読み取れる。『太平記』『梅松論』とも、新田・楠木勢の布陣については一致した記述を残しているのである。

正成の本陣

この時楠木正成が陣をとった場所については、地元に興味深い伝承が残っている。ここで、近代の郷土誌『兵庫史談』（一六号、昭和二年（一九二七）を参照し、正成の本陣について考えてみよう。『兵庫史談』は明治三十八年（一九〇五）に結成された神戸史談会が、大正十五年（一九二六）に創刊した機関誌である。

写真88　二本松古墳（『神戸古今の姿』より転載）破壊直前の写真と思われる。

二本松の地は房王寺の経塚なるを以て字を経塚と呼ぶ、大楠公の本陣をおかれし所なり。

右のように『兵庫史談』は「二本松」「房王寺の経塚」に正成の本陣が置かれたとしている。「二本松」「房王寺の経塚」とは、現在の会下山公園の西にあった通称「夢野二本松古墳」のことである。房王寺は早くに廃寺になったが、その地名を「房王寺町」として現在も残している。ちなみに昭和四年に発刊された『神戸古今の姿』（昭和五十二年歴史図書社より復刊）は、明治三十四年の新湊川開削工事の際、現在の室内小学校前の字「塔の本」より出土した、房王寺跡の礎石と推測される写真、同小学校のプール工事に伴って出土した古瓦の写真を載せている。

夢野二本松古墳は現在その姿をとどめていないが、その立地についても『兵庫史談』（二六号、昭和三年）が記述を残している。

二本松古墳は頓田山脈の三叉点上に高く築き上げられる一大円墳にして、北は鵯越の高地より俯瞰（ふかん）し得べく、南は遠く吉田新田の浜まで目に遮るものなし。

つまり、二本松古墳は浜まで見通せる高さをもった眺望の地だったのである。

眺望に加えて注目されるのは、この古墳の位置と道との関係である。古墳は古道越え、長坂越えと呼ばれる山側から夢野・平野に出る山道の南端に位置している。古道越えは妙法寺川の谷から鹿松を越えて長田に出る道である。長坂越えは太山寺、白川方面から長田に出る道で兵庫の遊女が太山寺詣に使ったという伝承がある。これらの道が交差し、長田の谷を南に出たところにこの古墳はあったのである。さらに、注目すべきは、古墳の東北には鵯越の南の口があったことである。

以上をまとめると、この古墳は北・西北の方面から神戸の平野部に出てくる敵を防ぐ位置にあったといえる。先にも述べたように、『太平記』によれば足利勢の山手軍は鹿松岡、鵯越付近から平野部に進攻したことになっており、このような点からも夢野二本松古墳の付近は、山手軍・大手軍に対する防衛線を築くのに適した地点であったと考えられる。

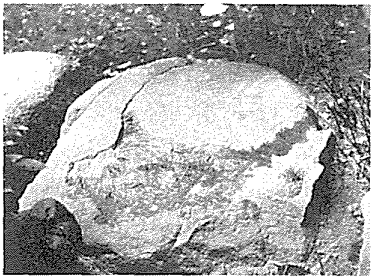


写真89　伝房王寺跡の礎石（『神戸古今の姿』より転載）

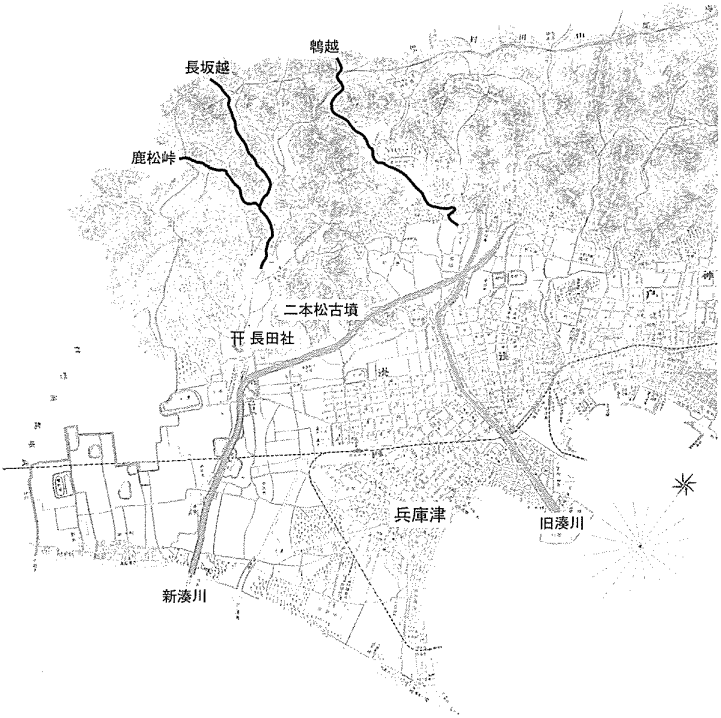


図59　二本松古墳の位置と交通路（『神戸開港三十年史』付録地図に加筆）

このように、眺望に恵まれ、交通路を押さえる位置にある古墳が、南北朝内乱期の砦として使われた例がほかにもある。芦屋市春日町の金津山古墳は浜手の街道の北に接し、周辺の平野部を見通すことができる位置にあった。平成十一年（一九九九）同古墳の発掘が行われ、二つの興味深い事実が明らかになった。

第一は古墳に数カ所の掘割が施されていたことである。古墳は後円部を北に、前方部を南にしているが、掘割は後円部を防御するようにめぐらされている。

第二はこの掘割の中から十四世紀の遺物が発見されたことである。これら発見された遺物は、居館や一般農村など定住地の遺跡に比して煮沸や食事に利用する土器類の比重が高い。

以上より、十四世紀のある時期にこの古墳が防御施設に変えられ、一時的に人が駐留したことが窺われる。先に述べた足利勢が九州に落ちる直前には打出浜で楠木正成と足利勢が戦っているし、後に述べる観応の擾乱の際にも打出が合戦の舞台となっており、これらの合戦の時に古墳が砦として改造されたと考えられるのである（『金津山古墳〔第一一地点〕（前方部西半域の周濠）埋蔵文化財発掘調査実績報告書－震災復興調査』）。

このような点から考えても、夢野二本松古墳は正成の本陣であったかどうかはともかく、湊川合戦の際に軍事施設として利用された可能性は高いといえるだろう。

しかし、残念なことにこの古墳は昭和三年に水道工事に伴い破壊され、浄水場内に取り込まれてしまった。この時、神戸史談会は『兵庫史談』誌上で、取り壊しに強く反対した。『兵庫史談』（二六号）は次のように述べている。

吾人は夢野二本松の古墳が其丘阜の表面が、延元の昔大楠公が湊川戦に於ける陣地たりしこと、表土と古墳との中間は平安時代の経塚なると、丘阜の底部は類例稀なる石積壙の古墳なる三種の史蹟なるより、切に此の破壊を中止せられんことを期待せしも、其の希望は空しく徒事に属し、昭和二年十月二十八日丘上の松は伐り去られ、（中略）終に十二月十七日いよ〳〵取潰しの事に決し（後略）（ルビは引用者）

つまり、史談会は古墳の歴史的価値が、①表面は湊川合戦の戦跡、②中間は平安時代の経塚、③底部は古墳、という三つにわたってあげられることを強調し、その保存を願ったのであった。この保存運動がどれほ

どの広がりをもったのか興味深いところではあるが、右の引用にあるように、結局古墳は破壊されてしまったのである。

現在、楠木正成の本陣の記念碑は会下山公園内に建てられている。これはかつて夢野二本松古墳があった場所の東にあたる。

『太平記』と『梅松論』

以上のように、足利勢は尊氏率いる海路軍と山手、大手、浜手の陸路軍に分かれて攻撃態勢を取り、迎え撃つ後醍醐方は山手に楠木勢、浜手には三隊に分かれた新田勢が陣を張った。そして延元元年（建武三年・一三三六）五月二十五日、両軍はついに衝突する。

この合戦の経過に関するまとまった史料は、先にも引用した『太平記』と『梅松論』であるが、両書の視点や記述の姿勢には大きな違いがみられる。大まかにいえば、『梅松論』は足利氏を賛美する目的で著された書物であり、足利側が勝つべくして勝った合戦として、その経過を記述している。後醍醐方を「凶徒」と記しているのはその最たるものであろう。また、楠木正成の奮戦を描き、義貞を見限って尊氏と和睦することが正成の本心であったとするなど、正成に対する思い入れが感じられる。しかし、一方で義貞については簡単に退却したことが記されるにすぎない。このような正成重視、義貞軽視も『梅松論』の特徴である。

一方の『太平記』は、『梅松論』にはない後醍醐方の武将の奮戦――遠矢を尊氏勢の船に射込む矢の名手

写真90　楠木正成本陣跡の記念碑（兵庫区会下山公園）

写真91　本間重氏遠射の碑（兵庫区和田岬小学校内）

本間孫四郎や、義貞の身代わりになる小山田高家――を大きく取り上げるなど、楠木、新田勢の戦いぶりを中心に合戦を描いている。『太平記』は特に足利側をおとしめて書いているわけではないが、『梅松論』と比べると、後醍醐側から合戦を見ているといってよいであろう。

両書の視点の違いは、戦いが始まる瞬間、『太平記』は陸から海を（つまり後醍醐方から足利方を）、『梅松論』は海から陸を（つまり足利方から後醍醐方を）眺める視線で、軍勢の配置を記している点に、はっきりとあらわれている。

以上のように、『太平記』と『梅松論』はそれぞれ独自の視点から合戦を眺めている。以下ではこの点に注意しながら、より詳しい記述を残している『太平記』を中心に、『梅松論』を併せて参照しつつ、合戦の過程を追っていきたい。

『太平記』が描く「湊川合戦」

海陸の足利勢が兵庫に姿をあらわしたのは、『太平記』によると五月二十五日の辰の刻（午前八時頃）であったという。

『太平記』は、矢の名人本間孫四郎が足利勢の船に遠矢を見事に射込んだのに対し、足利側から選ばれた射手の佐々木信胤の矢が新田勢に届かなかったエピソードを紹介した後、足利勢の上陸を次のように記している。

四国ノ兵共、大船七百余艘、紺部ノ浜ヨリ上ラントテ、磯ニ傍テゾ上リケル。兵庫嶋三箇所ニ磬ヘタル官軍五万余騎、船ノ敵ヲアゲ立ジト、漕行舟ニ随テ、汀ヲ東ヘ打ケル間、舟路ノ勢ハ自進デ懸ル勢ニミヘ、陸ノ官軍ハ偏ニ逃テ引様ニゾ見ヘタリケル。海ト陸トノ両陣互ニ相窺テ、遙ノ汀ニ著テ上リケレバ、新田左中将ト楠ト、其間遠ク隔テ、兵庫嶋ノ舟著ニハ支タル勢モ無カリケル。依レ之九国・中国ノ兵船六十余艘、和田ノ御崎ニ漕寄テ、同時ニ陸ヘゾアガリケル。

つまり、足利勢のうち四国勢は「紺部」（神戸）の浜に上陸しようと、磯沿いに東に進んだため、上陸を阻もうとする新田勢も兵庫嶋から東へと移動した。その結果、浜手の新田勢と山手の楠木勢の連携は断たれ、兵庫嶋の守備も手薄になってしまった。そこを突いて、足利方の海路軍本隊の九州・四国勢が兵庫に上陸したのである。

『太平記』は、海上を動く海路軍につられて新田勢が動いたことが、足利勢の上陸を容易にしたという構図で合戦の始まりを描いている、とまとめることができるであろう。

このように足利軍の上陸を描いたあと、『太平記』の視線は山の手の合戦に向けられる。山の手では楠木勢が、足利勢の山の手軍と直義の率いる大手軍を迎え撃ち、直義を「須磨ノ上野」に退けた。直義の危機を知った尊氏は、湊川の東に大軍を差し向け、楠木勢を圧迫した。その結果、楠木勢は窮地に追い込まれ、正成以下一族は自害した。『太平記』はその様子を次のように記している。

湊河ノ北ニ当テ、在家ノ一村有ケル中ヘ走入テ、（中略）楠ガ一族十三人、手ノ者六十余人、六間ノ客殿ニ二行ニ双居テ、念仏十返計同音ニ唱テ、一度ニ腹ヲゾ切タリケル。

かくして、後醍醐方の山手防衛線は崩れ、再び押し返した直義勢と兵庫に上陸した尊氏勢は合流し、東の新田勢に襲いかかった。この時義貞は、ようやく自分の目前にいる「紺部」から上陸した敵が、足利の本隊ではないことに気づく。

楠已ニ討レニケレバ、将軍ト左馬頭ト一処ニ合テ、新田左中将ニ打テ懸リ給フ。義貞是ヲ見テ、「西ノ宮ヨリアガル敵ハ、旗ノ文ヲ見ルニ末々ノ朝敵共ナリ。湊河ヨリ懸ル勢ハ尊氏・直義ト覚ル。是コソ願フ所ノ敵ナレ。」トテ西宮ヨリ取テ返シ、生田ノ森ヲ後ロヲ当テ四万余騎ヲ三手ニ分テ、敵ヲ三方ニゾ受ラレケル。

右のように、湊川方面から進んでくる敵こそ足利兄弟と悟った義貞は、「西宮」（ただし『太平記』の多くの写本は「脇ノ浜」とする。よってここでは、「西宮」ではなく、「脇ノ浜」と考えておきたい）から「生田森」（中央区）にとって返し、残った兵を三手に分けて足利勢と再び戦闘を開始する。義貞は自ら足利の陣中に討ち入るが、もはや兵力に劣る新田勢は足利勢を支えきれなかった。かくして新田勢は、「生田ノ森ノ東ヨリ」京都へ退却し始める。

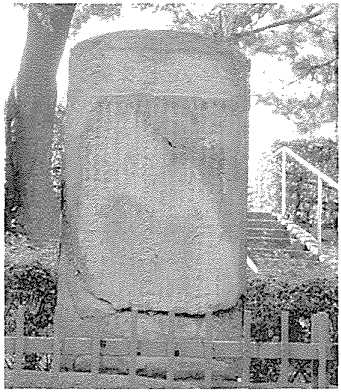


写真92　小山田高家顕彰碑（『太平記』にあらわれる「求女塚」を現在の処女塚に比定し、江戸時代に建立された）（東灘区処女塚内）

総大将義貞は味方の軍勢を逃がすために、最後尾で戦いながら撤退したが、馬を射られ立ち往生する。義貞は「求塚」の上で乗り換える馬を待ったが、味方は

すでに撤退した後で、義貞は孤立無援の状態に置かれる。その時、義貞の危機に気づいた家臣の小山田高家がとって返し、義貞を馬に乗せて逃れさせ、自身は敵を引きつけて討ち死にする。ちなみに同所には高家の武勇をたたえ、江戸時代の弘化三年（一八四六）に建立された碑が現在も残っている。

こうして、『太平記』が描く「湊川合戦」は幕を閉じる。合戦の経過をまとめると、『太平記』は①海路軍が東に新田勢を引きつける、②これによって防御が手うすになった兵庫に海路軍の本隊が上陸、③山の手で楠木勢が敗北、④山の手の直義勢・兵庫に上陸した尊氏勢と、東からとって返した新田勢が生田で戦闘、⑤新田勢の敗北、という順序で合戦を描いているといえよう。

『梅松論』が描く「湊川合戦」

一方、『梅松論』は湊川合戦をどう描いているのだろうか。

廿五日卯刻、細川ノ人々四国ノ船五百余艘本船トシテ、猶追風ナレハ昨日ノ如ク帆ヲアケテ敵ノヒカヘタル湊川兵庫ノ嶋ヲ左ニナシテ馳シ、是ハ凶徒ノ跡フサカン為也、将軍ノ御座船ニハ錦ノ御旗日ヲ出シテ、天照皇大神、八幡大菩薩ト金ノ文字ノキラメキタルガ浦風ニヒラメキシ御船出ルヽ時ハ毎度鼓ヲ鳴サレシ間、同時ニ数千艘ノ帆ヲ上テ、淡路瀬戸五十丁セハシトキシリ合セテ、更ニ海ハ見ヘス、漕並ヘタリシニ陸ノ御勢モ同打立テ一谷ヲ馳越テ進シ程ニ、辰ノ尾斗ニテソ有シ兵庫ノ嶋近ク成テ見渡シタリシカハ、

『梅松論』によれば、卯の刻（午前六時頃）に「大倉ノ谷ノ奥」を出帆した海路軍は、「辰ノ尾」頃（午前八～九時）に兵庫嶋に近づいた。海路軍は兵庫嶋を左手に見ながら東に進んだが、これは兵庫の後醍醐方が

東に逃走する路を断つためであった。そして、東よりに軍勢を展開した海路軍に対して西側から攻撃をしかけたのが、九州の大名少弐頼尚の率いる陸路軍の浜手隊であった。

少弐勢のうちから武藤豊前次郎・対馬小次郎の二騎が突撃したことを皮切りに、少弐勢は兵庫になだれ込んだ。

（少弐勢の）跡ノ多勢ツヽキシ程ニ軈テ和田ノ御崎ノ合戦破テ兵庫ニ煙揚リシカハ大道モタマラス山ノ手又如此、去程ニ四国ノ勢ハ兵庫ノ敵ヲ落サシト、生田ノ森辺ヨリ上ケル処ニ義貞兵庫ノ軍ニ打負テ三千騎斗ニテ引ケルニ行逢タリ、（中略）残者ナク船ヨリ上ケレハ義貞打破テ都ヲサシテ落ニケリ、

和田岬の合戦に勝利した少弐勢は、兵庫の町に火を放った。兵庫の町が煙をあげると、陸路の他の二隊である大手、山の手軍も均衡を破り、後醍醐方を圧倒した。『梅松論』には少弐氏を賞賛する記事が多く含まれているといわれるが、ここでも少弐勢の突撃が、戦局を足利方優勢に導く大きな意味を持ったことになっている。

こうして兵庫の合戦が足利方有利に展開すると、海路軍は兵庫から退く後醍醐方の軍を討ち漏らさないように、兵庫より東の「生田ノ森辺」に上陸する。兵庫から敗走してきた新田勢は上陸した新手の足利勢にも敗れ、そのまま京都に逃走した。

以上のように『梅松論』は、①陸路の浜の手を進む少弐勢が兵庫から新田勢を駆逐し、②その逃走路に生田から上陸した足利勢の海路軍が立ちふさがり、③これによって新田勢が都に退却する、という構図で合戦の前半部を描いている。

そして、これを受けた合戦の後半部では、④残された楠木勢と足利勢との戦いが描かれる。

義貞打破テ都ヲサシテ落ニケリ、（細川）定禅義貞ニハ目モカケス、湊川ニ正成カ残テ大手ノ合戦最中ノ由聞ヘシカハ、下ノ御所（直義）ノ御勢ニ馳加テ責ル程ニ申刻過ニ正成並弟七郎左衛門尉以下一所ニテ、自害ノ輩五十余人打死三百余人惣而浜ノ手以下兵庫湊川ニテ打取ル、頸ノ数七百余トソ聞ヘシ、（中略）湊川ノ戦破レシカハ御陣ハ御下向ノ時ノ兵庫ノ御堂也、高越後守ノ手ノ者共打取シ間、正成カ頸持参セラル、実検アリ、マキレヘキモノニアラス哀ナル哉、

右のように、新田勢を打ち破った細川定禅らが加わった足利勢に正成は追い込まれ、申の刻（午後四時頃）過ぎに楠木一族は自害する。正成の頸は足利方本陣の魚御堂（うおみどう）で実検され、正成本人の頸であることが確認された。このあと、実は正成が義貞を見限っていたことなどが語られるなど、正成の死を悼む記事が続く。先にも述べたように、義貞の行動を「義貞打破テ都ヲサシテ落ニケリ」と片付けるのにくらべ、正成の最期を情緒的に述べるのが『梅松論』の特色である。

「湊川合戦」のイメージ

以上のように、『太平記』と『梅松論』の描く「湊川合戦」の展開はかなり異なっている。しかし、楠木勢と新田勢が戦闘を繰り広げた場所については、ほぼ一致しているといってよい。楠木勢はいずれも湊川の近辺で戦ったことになっている。新田勢については、『太平記』では「脇ノ浜」から「生田森」、『梅松論』では「生田ノ森」を戦場としており、いずれも兵庫の東で戦ったことになっている。

ここで特に注意したいのは、新田勢の戦闘場所である。右にまとめたように、新田勢の戦闘は湊川よりか

なり東で展開されている。現代的な感覚からすれば、新田勢の戦闘場所も含めてこの合戦を「湊川合戦」と総括するのは、バランスを欠いているように思えるのである。

では、なぜこの合戦が「湊川合戦」と総称されたのであろうか。第一に考えられるのは、この合戦の意義を、楠木正成の戦いとその最期に求める見方が強かったのではないか、ということである。先に見た『梅松論』などは、その典型例といえるだろう。正成に焦点をあわせれば、この戦いを湊川の戦いと称することは不自然ではない。

第二に、当時の社会において「湊川」がこの地域を総称するに足る宿としての実力を持っており、それゆえに土地名称として知名度が高かったのではないかということが考えられる。例えば『太平記』では後醍醐天皇が隠岐島に送られるとき、湊川を越えたことが記されているし（巻第四）、後にふれる観応の擾乱でも尊氏が湊川に本営を置いたとされている（巻第二十九）。このように『太平記』には湊川がしばしば登場するのである。

おそらく、正成をこの合戦の中心人物とする見方と、湊川の知名度が合わさって、この合戦は「湊川合戦」と名付けられたのであろう。合戦の名称の選ばれ方からは、現代的感覚とは異なる、当時の空間の把握の仕方が窺えて興味深い。しかし、その名称（湊川合戦）と、現実の合戦（湊川から脇浜にかけての合戦）との間には、少なからずずれがあることにも注意が必要である。

ところで、『梅松論』には、『太平記』に見られない印象的な記述がある。先にも引用した、尊氏率いる海路軍の様子を記した箇所である。

将軍ノ御座船ニハ錦ノ御旗日ヲ出シテ、天照皇大神、八幡大菩薩ト金ノ文字ノキラメキタルガ浦風ニヒラメキシ御船出ル、時ハ毎度鼓ヲ鳴サレシ間、同時ニ数千艘ノ帆ヲ上テ、淡路瀬戸五十丁セハシトキシリ合セテ、更ニ海ハ見ヘス、

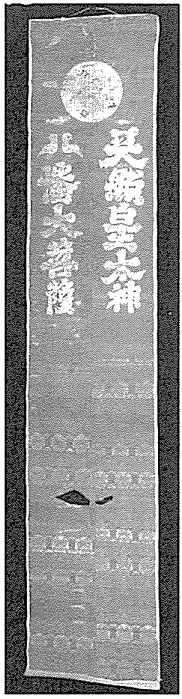


写真93　錦の御旗（永青文庫蔵）
細川頼之が後小松天皇から授与されたものと伝えられる。

つまり、『梅松論』は、尊氏の「御座船」に官軍の証としての「錦ノ御旗」が掲げられていたとするのである。しかも、その描写は「天照皇大神、八幡大菩薩ト金ノ文字ノキラメキタルガ浦風ニヒラメキ」と、美麗な旗がきらめく様子を強調しているのである。

湊川合戦といえば、楠木勢の官軍の証、菊水の旗が戦場ではためく様子を想像するのが一般的であろう。しかし、足利氏と北朝が政権を握っていた室町時代においては、足利方が官軍として錦旗を掲げ、正成や義貞と戦うという湊川合戦のイメージがあったのである。

先にも述べたように、『梅松論』は足利氏を賛美する姿勢で貫かれているが、その冒頭には将軍を「和漢トモニ朝敵ヲ討武将ノ職也」と定義する一節がある。『梅松論』は湊川合戦を、尊氏が錦旗を掲げた官軍として朝敵に圧勝する戦いとして描くことで、尊氏が正統な将軍であることを強調しているのである。後世、

足利氏の没落や『太平記』読みの盛行により、このような湊川合戦のイメージは歴史の深層に沈殿してしまったが、室町時代には室町時代独自の湊川合戦のイメージがあったのである。

今一つ湊川合戦のイメージとして注意すべきは、この合戦を独立した一つの合戦としてとらえるべきではない、ということである。足利勢が京都を目指すために、湊川に立ちふさがった後醍醐方の主力たる新田・楠木勢を打ち破らなければならなかったことはいうまでもない。しかし、足利勢の京都への進攻はより広い範囲で展開していた。

多田院（川西市）に結集するいわゆる多田御家人の一人、森本為時が残した軍忠状（『県史』九「北河原氏家蔵文書」一）によると、五月二十四日に足利方の大将が野鞍（ののくら）（三田市）に進軍してきたのを機に、為時はその配下に入った。そして湊川合戦当日の五月二十五日には藍荘（三田市）で後醍醐方と戦い、翌二十六日に京都に進攻している。つまり、湊川合戦と同時併行して、西摂津北部においても合戦が繰り広げられていたのである。

湊川合戦は、両軍の大将が激突した合戦として、他の合戦にはない特別な意味が与えられている。しかし、この合戦は『太平記』や『梅松論』にはあらわれない、内陸部で展開した合戦と連動していたのである。

地域にとっての湊川合戦

以上主に『太平記』『梅松論』に基づきながら、湊川合戦の経過について述べてきた。両書の叙述はいずれも軍勢の動きに重きを置いており、楠木正成、新田義貞、足利尊氏など、合戦のために外部からこの地域に入ってきた人物たちについてはそれなりに詳しい。しかし、この合戦に地域社会がどう関わったのかについて、これらの書物は十分な記述を残してくれていない。そこで、合戦と地

写真94　長田社愁状案（長田神社文書）

域の関わりを知るために、地域に残された史料に注目してみよう。

「長田神社文書」のなかに、社領の寄附を求めた建武三年（一三三六）十一月付の文書、長田社愁状案（写真94）が残されている（『県史』一「長田神社文書」三）。後醍醐天皇側は建武三年を二月二十九日に延元元年と改元しているから、十一月付のこの愁状は建武年号を使い続けた足利政権に対して提出されたと考えられる。残念ながらこの文書の前半部は失われているが、残された部分から興味深い事実が窺える。

冒頭で長田神社は「宮人等は社壇を荘厳せしめ、無弐の御祈禱を致す、社人等に至っては、鵜越に発向し、当所を警固せしめおわんぬ、しかるに今□有道の善政に逢い奉り、いかでか愁訴達せざらんや」と述べている。つまり、社領の寄附を求めるにあたって、同社は祈禱と鵜越の警固を務めた功績を強調しているのである。

このうち、注目されるのは鵜越の警固である。先にふれたように、この年五月二十五日の湊川合戦では陸路をとる足利勢の山手隊は、鹿松岡、鵜越から平野部になだれ込んだ。この文書が作成された建武三年十一

月という時点に注目すれば、長田社が鵯越を警固したのは、まさに湊川合戦の際であったと考えられる。文書から「警固」の具体的な内容を窺うことは困難であるが、直接戦闘を行うのではなく、足利勢の進軍を支援したものか、楠木勢を平野部に封じ込めるものであったのであろう。いずれにせよ、合戦の重要な地点に地域の人びとが動員され、合戦の補助的な役割を割り振られたことは注目される。地域の人々は、眼前でくり広げられる合戦と無関係ではなかったのである。

また、先に述べたように本文書で長田社は足利政権に対して所領の寄進を求めている。その所領とは社領内に設定された地頭職と、兵庫中荘内の公文名八町であった。文書によれば、この地頭は品河孫次郎という武士で、彼は湊川合戦の際、後醍醐側として戦い、敗戦後に姿をくらましたという。つまり、長田社は地頭に対抗するために足利側の動員に応じ、地頭が没落した後に、その地頭職を恩賞として足利側に求めたのである。

次に、福祥寺（須磨寺）の歴史を書き記した『当山歴代』に注目してみよう。『当山歴代』は嘉応二年（一一七〇）から宝暦二年（一七五二）に至る須磨寺の年代記である。その中に「建武高階入部」という簡潔な記述が残されている（写真95）。「入部」とは、須磨寺側の意向とは関係なく、外部勢力である高階氏が一方的に須磨寺に入ってきたことを意味する。そう考えるならば、建武年間の高階氏の「入部」は、建武三年の湊川合戦に関連して起こっ

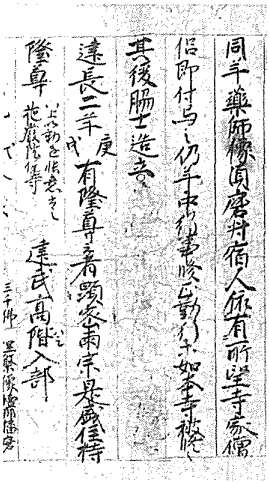


写真95　『当山歴代』（福祥寺蔵）に見える「高階入部」の記事

たと推測される。

先に「足利勢の編成」の項で述べたように、陸路を進む足利勢の大手軍は、「須磨ノ上野」から湊川を目指し、楠木勢に押された後は同じく「須磨ノ上野」に退却している（『太平記』巻第十六）。須磨寺の山号が「上野山」であることをふまえれば、足利勢の大手軍は須磨寺に駐屯したと考えられる。

さらに、注目されるのは『梅松論』にみられる大手軍の構成である。同書には「大手ハ下御所（直義）、副将軍越後守師泰、大友、三浦介、赤松、播磨美作備前三ヶ国惣軍勢也」とある。このうち注目されるのが、副将の越後守高師泰である。「高」氏は本来「高階」姓であるから、師泰が「高階」と記述されることは十分に考えられるのである（ただし高階は「たかしな」と読むので、階に付けられた「ハシ」の振り仮名は誤記であろう）。

以上より、湊川合戦の直前、大手軍の副将高師泰が須磨寺に駐屯したと考えて間違いない。駐屯した軍勢の数は不明であるが、軍勢の駐屯によって大量の食料、燃料等が徴発されたであろう。動員や駐屯を通じて、湊川合戦は地域社会に大きな影響を与えたのである。

戦場の訪問者

かくして地域を巻き込みながら「湊川合戦」は終了した。それでは、戦闘が終わった湊川周辺はどのようになっていたのだろうか。残念ながら、その様子を十分に示す史料は残されていはいない。しかし、合戦終了直後、楠木氏の故郷河内国から湊川を訪れた人物がいた。

建武三年（一三三六）六月二日の日付をもつ、朝舜という僧侶がしたためた書状が、奈良興福寺の院家大乗院の記録の紙背（裏）文書として残されている。役割を終えた朝舜の書状が裏返されて再利用され、大乗院の記録用紙として使われたため、記録用紙の裏側に書状が残されたのである。このように、裏返されて

再利用されたため、裏面に残された文書のことを紙背文書、あるいは裏文書と呼ぶ。この朝舜書状については、豊田武、横井清の研究がある。以下両氏の研究を参照しながら、書状の内容を検討してみよう。

朝舜は大乗院の僧侶で、問題の書状は、朝舜が経営に関わっている荘園の状況について、禅南院（おそらく大乗院配下の院家であろう）に報告したものである。残念ながら書状には、朝舜が経営に携わっていた荘園の名前がないが、この書状が河内国宇礼志（うれし）荘（大阪府富田林市）の課役に関する記録用紙に再利用されていることから、朝舜が宇礼志荘を管理していた可能性が高い。

書状の大半は、荘園経営に関する報告であるが、書状の末尾と追伸の部分に、朝舜の耳に入った湊川合戦に関する情報が記されている。まず、本文の末尾には次のようにある。

楠判官并地下庄官少々打たれ候の由、伝え承り候とも分明ならず候の間、注進あたわず候、委細の事は重ねて申し入るべく候、事の次第は、定使申さしめ候おわんぬ

つまり、「楠判官（正成）と在地の荘官たちが少々討たれたと伝え聞いているが、正確にはわからないので、ご報告できません。詳しいことは追って申し入れます」と記されているのであるが、その内容は次の二点にまとめられる。

①正成と河内国の大乗院領荘園（おそらくは宇礼志荘）の現地管理者である荘官（しょうかん）らが、湊川合戦で戦死したこと。

②朝舜が湊川合戦の情報を集めて、書状の宛先の禅南院に知らせることを約束していること。

さらに、追伸部分には次のようにある。

尚々申さしめ候、和田と申し候者、河内国守護去月の廿八日に同人を兵庫まで遣て候へは、晦日来候念仏を申し候者、楠判官廿五日申時小家に火かけて自害し仕り候を、足利殿の手に細川殿と申し候同じ一属(族)頸を取り候二日懸て候兵庫陣に、判官頸に治定し仕り候て、魚御堂と申し候僧所へ所領五十丁之処を寄て、孝養をさせられ候はやと申し候、一属(族)廿八人腸(はら)きり候らいき、其中に討なされて疵をこうむるをりから、布ひきに候なんとうけ給い候とも実説をしらず候、(後略)

朝舜は、合戦の情報について正確にはわからない、と本文末尾には記していたが、直後に得たと思われる情報を追伸として書き記しているのである。その内容は、おおまかに次のように整理できるであろう。

③河内国の守護が和田という者を昨月（五月）二十八日に兵庫に遣わしたこと。湊川合戦は五月二十五日であったから、合戦のわずか三日後に河内国守護が兵庫に使者を遣わしたことになる。これ以前河内国守護は楠木正成であったが、正成戦死直後のこの時点で誰が守護であったかは定かではない。しかし、いずれにせよ、河内国は後醍醐側の軍事的な基盤であったから、後醍醐政権を支える要人であった可能性が高い。また、楠木の近辺には和田(わだ)を名乗る一族がおり、使者の和田もこの一族出身者であると推測される。

④使者の和田は、晦日(みそか)に自分のもとにやって来た念仏僧から、正成の最期について詳しい話を聞いた。僧によると、正成は申の刻（午後四時頃）に自害し、その首は細川一族によって足利の本陣に運ばれ、首実検の後、魚御堂で供養された。足利氏は正成を供養する費用を捻出するため、魚御堂に五〇町の田地を寄附したという。

⑤仏僧から、負傷して布引に退いた人々がいたと聞いたが、それが事実か確認できていないこと。

以上、朝舜の書状から読み取れる内容を五点にまとめた。このなかでとりわけ注意を引くのは、合戦の直後に河内国守護が、戦場に使者を派遣したことである。では、使者和田の使命は何だったのであろうか。

この問題を考える上で参考になるのは、和田が正成の最期の様子や、生き残った者がいる可能性を念仏僧から聞き出し、国もとに報告していることである。また、①のように、正成とともに河内国の荘官たちが従軍していたことをふまえると、和田は楠木勢として湊川で戦った河内国の人びとがどのような運命をたどったか、負傷などにより河内国に帰れない者がいないかを尋ねて、戦場を訪れたと考えられる。

このように戦争が終わった湊川周辺の地には、戦死者を弔う念仏僧や、出征した縁者の運命を尋ねる使者たちの姿が、多くみられたのではないだろうか。

金谷経氏の蜂起

湊川合戦や藍荘での合戦に打ち勝った足利勢は京都に入り、比叡山に立て籠もる後醍醐方と戦った。その結果十月、後醍醐天皇は足利方に下り、新田義貞は再起を図るため北陸に退いた。こうして、建武三年（一三三

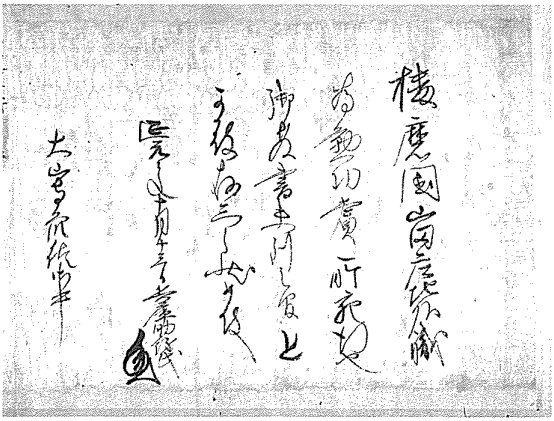


写真96　金谷経氏寄進状（太山寺文書）

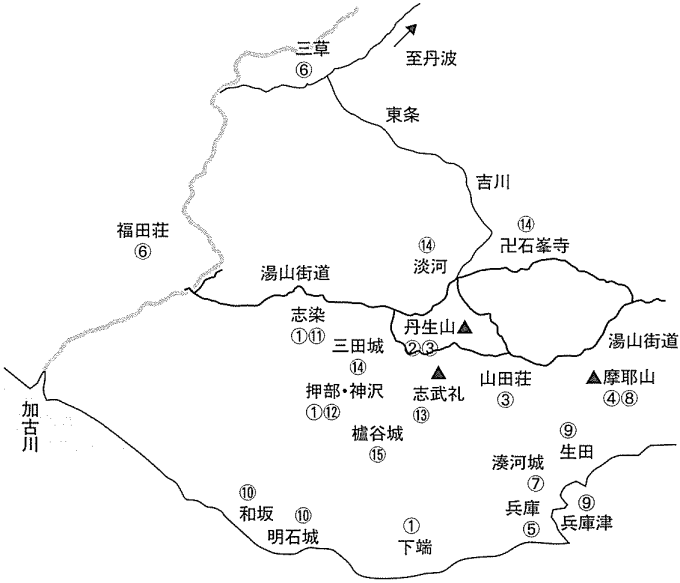


図60　金谷勢の展開（数字は本文中の番号に対応）

六）の合戦は足利方の勝利に終わった。後醍醐方の播磨国守護新田義貞が敗退したことによって、播磨・摂津国は足利方の支配下に置かれた。

しかし、戦乱はすぐには収まらなかった。足利政権に下った後醍醐天皇が十二月に京都を脱出し、吉野で南朝を起こすと、各地で後醍醐方の挙兵が相次いだ。東播磨、西摂津でも、播磨国の東条谷（加東市）で新田氏配下の金谷経氏が蜂起した。おそらく金谷氏は義貞が京都に退却した後もこの地域に留まり、再起の機会を窺っていたのであろう。

金谷氏は東条谷から南に勢力を展開し、淡河荘、摂津国の山田荘を勢力圏に収め、山田荘丹生山を拠点にして各地に兵を繰り出して足利勢と衝突した。赤松方に

属し、金谷勢と戦った揖保荘（たつの市）地頭島津氏らの軍忠状からは、金谷勢が広い範囲に兵を繰り出したことが窺われる。次に、軍忠状にあらわれる金谷勢と赤松勢の衝突地点を列挙してみよう。

①建武三年（一三三六）九月五日～…播磨国下端（下畑）・押部・志染（『県史』九「越前島津家文書」八）
②同年十月二十日…丹生山（同上）
③同四年九月六・七日…丹生山・山田荘（同上一二）
④同五年二月十三日…摩耶山（同上一三）
⑤同年四月十七日…兵庫（『薩藩旧記』前集十五「入来本田氏文書」）
⑥同年同月…福田荘・三草山（『県史』九「越前島津家文書」一四）
⑦同年六月二日…「湊河城」（『薩藩旧記』前集十五「入来本田氏文書」）
⑧同年同月三日…「前（摩耶）城」（同上）
⑨同年同月…兵庫島・生田（『県史』九「越前島津家文書」一四）
⑩同年七月二十六日…「明石城」・和坂（同上一五）
⑪暦応二年（一三三九）七月十三日…赤松方、志染に集結（同上一九）
⑫同年八月十三日…押部・「神沢城」（同上）
⑬同年同月二十日…志武礼陣に赤松方駐屯（同上）
⑭同年同月二十九日…淡河・石峯寺・「三田城」（同上）
⑮同年九月一日…「櫨谷城」、赤松方山田荘に駐屯（同上）

右から明らかなように、合戦は金谷勢の本拠地丹生山に近い山田荘、押部、志武礼、淡河、石峯寺（以上北区）にとどまらず、西は福田荘（小野市・加東市）、志染（三木市）、北は三草山（加東市）、南は和坂（明石市）、櫨谷（西区）、下畑（垂水区）、摩耶山、湊川、兵庫に広がっている。金谷氏の蜂起は全国的にはあまり有名とはいえないが、西摂津・東播磨の広い地域を巻き込んだ大きな事件であった。

金谷勢の本拠淡河・山田の位置　ではなぜ、金谷勢はこのように広い地域に勢力を展開できたのであろうか。注目したいのは、金谷勢が根城にした東条・吉川（よかわ）・淡河・山田の地理的特性である。

まず、淡河・山田は内陸の東西幹線道、

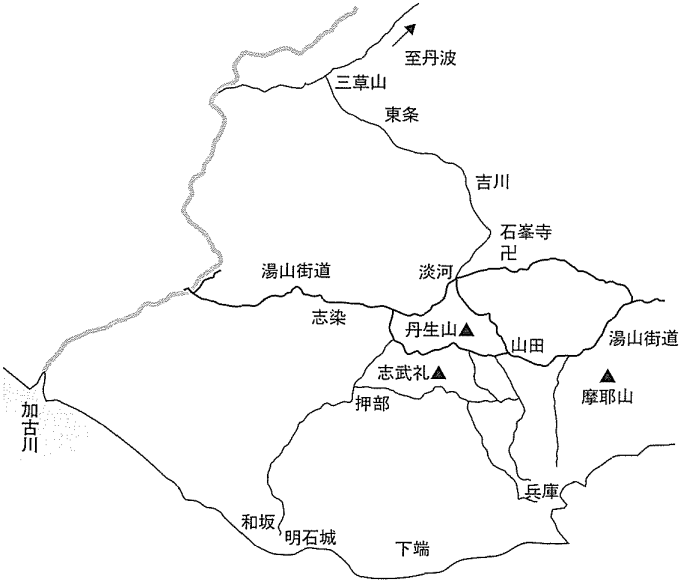


図61　湯山街道と周辺の交通路

湯山街道を含み込んでいた。湯山街道は伊丹から加古川に至る重要な幹線道であった。さらに淡河・山田には湯山街道から南に下って、兵庫に出る三つのルート――鵯越、天王谷越、再越（ふたたび）――を擁していた。つまり、淡河・山田は東西交通と南北交通の交点にあたる、交通の要衝だったのである。

また、山田側からは現在「炭谷越え」とよばれるルートをとって、兵庫を見下ろす摩耶山にあがることができた。さらに、淡河・山田の西端からは明石に通じる谷が南に走っている。これをつたえば、櫨谷、明石、和坂に容易に出ることもできるのである。

東条・吉川もそれぞれ山間部の東西交通と南北交通の接点を含み込んでいる。特に東条を北にあがれば、京都・丹波方面から西南に下ってくる丹波路と三草で交差する。このルートは、一ノ谷合戦に際して源義経が京都から播磨国に入るために利用したこともある重要なルートであった。このルートを西にとれば、播磨国の要路である加古川に出ることができる。

このように、金谷氏の拠点は各方面につながる文字通り交通の要衝であった。内陸の幹線東西道である湯山街道を押さえている金谷勢にとって、南下して明石、兵庫など湾岸の東西道の要所を押さえることができれば、西摂津の東西交通をほぼ完全に遮断することも可能だったのである。

このような交通路のあり方を念頭において、平家の勢力圏についてふりかえってみたい。西摂津の平家の拠点といえばいうまでもなく福原が注目されるが、福原の北に広がる山田荘は清盛が福原を本格的に別荘として整備する直前に手に入れた荘園であった。つまり、山田荘で東西交通の基軸である湯山街道を押さえ、山田荘―福原で南北交通の基軸を押さえるのが、西摂津、東播磨を押さえる平家の構想だったのである。湯

山街道を西に進めば加古川に至るが、加古川流域に平家領が多く見られることもこれと関連しているのであろう。金谷勢の勢力圏は平家の勢力圏を考える上でも興味深い。

金谷経氏の没落

しかし金谷勢の攻勢も長くは続かなかった。暦応二年（一三三九）、西播磨から進軍してきた赤松勢は、志染を経由して淡河・山田に迫り、同年八月には淡河荘の石峯寺を攻撃した。平成十六年（二〇〇四）、石峯寺の塔頭（たっちゅう）の一つ、岩本坊の跡地と想定される水田が地滑りを起こし、発掘が行われた。地滑りをまぬがれた中世面は焦土化しており、そこから採取された遺物は十四世紀前半以前のものばかりであった。この遺物の中には、焼け焦げた器や焼け落ちた土壁が含まれている。以上の状況から考えて、十四世紀前半の火災の跡を示すこの焦土層は、暦応二年八月の赤松勢による石峯寺攻撃の痕跡である可能性が高い。

この淡河攻撃の後、翌九月には赤松勢はついに山田荘内に進駐する。これ以後、この合戦に従軍した島津忠兼の軍忠状は残っていない。おそらくこの頃に金谷勢は没落したのであろう。

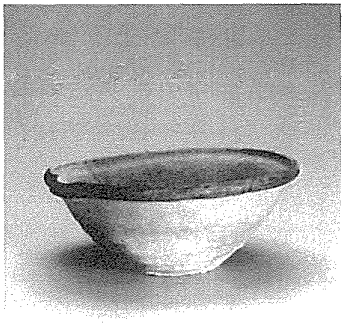


写真97　石峯寺伝岩本坊跡出土東播系須恵器（神戸市教育委員会蔵）

3　観応の擾乱と西摂津・東播磨地域

足利政権の分裂

後醍醐天皇の南朝樹立にともなう諸国の蜂起を鎮圧した足利政権ではあったが、その歩みは決して順風満帆とはいかなかった。というのも、政権の内部に大きな矛盾を抱えていたからである。

一般に初期の足利政権は、兄尊氏と弟直義（ただよし）の二頭政治であったといわれている。当時の記録や『太平記』によれば、尊氏が「弓矢の将軍」といわれたのに対し、その弟直義は「政道」「天下」を管掌したとされ、尊氏－軍事、直義－裁判等の軍事以外の政治、という分担がなされていたことが窺われる。

直義の政治は、鎌倉幕府に仕えた官僚や御家人を基盤に、貴族や寺社ら旧来の荘園領主と協調した路線を基本としていた。これに対して、足利家の執事であった高師直（こうのもろなお）や師泰（もろやす）らは新興勢力を基盤に、合戦に勝利することで発言力を強め、荘園に自分たちの勢力を浸透させようとした。こうして、直義と師直・師泰らの間に対立が生じることになった。このような状況の中で、尊氏は「弓矢の将軍」という性格から師直・師泰との関係が深く、直義との対立を次第に深刻なものにしていくことになるのである。

このような両者の対立がついに爆発したのが、いわゆる観応（かんのう）の擾乱（じょうらん）であった。観応元年（一三五〇）十一月尊氏は西国で反乱を起こした直冬（ただふゆ）（尊氏の庶子で直義の養子）鎮圧のため西国に進発し、兵庫を経由して西を目指した。一方の直義はこれ以前に政務を剥奪され、隠居状態にあったが、尊氏留守の隙を突いて京都か

ら出奔し、反尊氏・師直の兵を挙げた。これに驚いた尊氏は兵を返したが、京都での合戦に敗れ、播磨の書写山に陣をとった。尊氏に先行して西国で活動していた高師泰らも書写山に合流し、尊氏軍は勢力を回復した。

直義は尊氏攻撃のため、石塔頼房を播磨に派遣したが、頼房は尊氏が勢力を回復したことを見て、播磨国の山岳寺院光明寺（加東市）に立て籠もった。尊氏勢はただちに光明寺を攻撃したが、尊氏勢の士気は上がらなかった。尊氏が頼みとする赤松則祐も一族の朝範が光明寺城が神仏に加護されている夢を見たことを潮時に、自領の防衛を口実に戦線から離脱していった（『太平記』巻第二十九）。さらに、直義が畠山国清を光明寺の「後詰」（城を囲む敵を背後から攻撃する後方支援）として派遣したため、尊氏軍は窮地に陥った。

打出・御影の合戦　尊氏は光明寺の石塔頼房と後詰の畠山国清に挟撃されることをさけるため、西宮の神呪寺・鷲林寺・小清水（越水）を戦場にすべしという摂津国守護赤松範資の提言をいれて、光明寺の囲みを解いて、本営を湊川に移し、御影付近に兵を配備した。播磨国東条に進んでいた畠

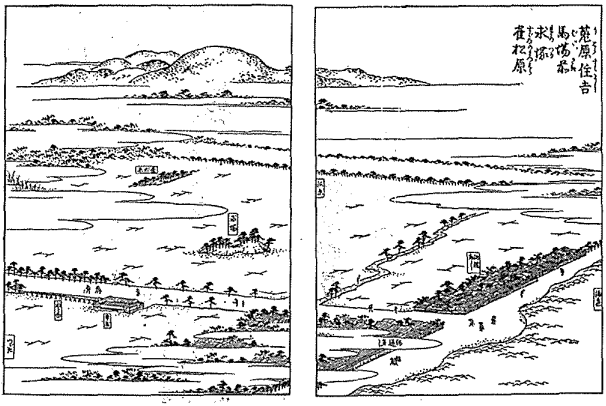


写真98　雀松原（『摂津名所図会』）
左側中央やや上に描かれた林が雀松原

写真99　雀松原の歌碑（東灘区）

山軍は尊氏勢と戦うため「湯山ヲ南へ打越テ、打出ノ北ナル小山ニ陣ヲトル」（『太平記』巻第二十九）と、有馬温泉を経由して南下し、打出（芦屋市）に陣を取った。また、石塔勢も光明寺を出て打出宿の東に陣をとった。かくして、御影の尊氏勢と打出の畠山・石塔・上杉ら直義勢が激突する戦いが始まった。

この合戦の様子を『太平記』から復元してみよう。尊氏勢は軍勢を大手と搦手の二手に分け、大手から合戦を仕掛け、時を見て浜側から搦手が攻め込み、敵を挟み撃ちにするという作戦をとった。『太平記』はこの合戦を高師直の家来薬師寺公義の行動を中心に描いているが、搦手に配された公義は「雀之松原」の木陰に隠れて合戦の始まるのを待った。「雀松原」は、『摂津名所図会』や『福原鬢鏡』（延宝八年（一六八〇））などの江戸時代の地誌類にもその名がみえ、現在も魚崎西町の公園内に雀松原の歌碑がある。

尊氏勢は、作戦通り大手から打出浜に突撃して戦端を開いた。しかし、尊氏勢は畠山軍に押し戻された上に、石塔軍の突撃を受けて総崩れとなり、湊川へと退きはじめた。搦手の薬師寺公義は大手軍の崩壊にも動揺せず、畠山・石塔軍と戦ったが、援軍を得ることができず、迫る敵と戦いながら「打出浜ノ東ヨリ御影浜ノ松原」まで退却し、敵を振り切って湊川の本営に逃げ込んだ。

敗戦を悟った尊氏は須磨の松岡城に入り、切腹する決意を固める。松岡城については『太平記』が唯一の記述を残している。それによると松岡城は「四方四町ニ足ラヌ」小城で、敗走してきた二万騎はとても収まり切らなかったため、尊氏勢は要人だけを城に入れ、下々の家来たちは城外に追い出されたという（巻第二十九）。松岡城の位置については『兵庫史談』（三四号、昭和三年〔一九二八〕）は須磨大手村勝福寺の背後の山を想定している。同誌によれば、大手村の「大手」は松岡城の大手を指すという。また近辺の「ハラキリ堂」と呼ばれる場所から大型の瓦が出土することから、この地を尊氏が切腹の場所に選んだ「十二間の堂」（『太平記』諸本のなかには「十二間ノ客殿」とする本もある）であったとしている。但し、松岡城が一度きりしか史料に姿をあらわさないことから、この城の大手が地名に残るほどの意味を持ったのかという問題があるし、あるいは「ハラキリ堂」という字が『太平記』にちなんで後につけられた可能性も捨てきれない。『兵庫県の地名』も大手村にあったとする説を踏襲するが、論拠について明記していないし、現在その遺構は確認できないという。松岡城の位置はいまだ謎のままであるといってよいだろう。

「小清水合戦」か
「打出合戦」か

さて、尊氏は切腹を覚悟したが、一方の直義側は和睦を希望していた。その報が伝わると尊氏は一転して切腹をとりやめ、和睦を選択する。ところが、その後尊氏抜きで高師直・師泰らが中心になって軍議がひらかれ、和睦するか、尊氏を赤松城に移して再決起するか、西国へ退却するか、などの方針が検討される。つまり、尊氏の決定は絶対ではなかったのである。この時、薬師寺公義は徹底抗戦を主張する。公義も尊氏の和睦決定を受け入れてはいなかったのである。しかし、主人の高師直らは敗戦のショックで、「朦々トシタ

ル計」で、結局和睦策がとられることになる。これをみて公義は、「運の尽きた人間とともに死んでも、高名にはならない。出家してこれらの人々を弔うほうがましだ」と判断し、陣を離れて出家する。そして、降伏した高一族は武庫川を渡ったところで、直義派の上杉・畠山勢によって殺害されるのである。こうして、観応の擾乱の前半戦は終了した。

ところで『太平記』はこの合戦を「小清水合戦」と呼んでいる。しかし、合戦の経過を以上のようにたどると、主戦場は西宮の越水地区ではなく、打出・御影浜であった。実際、この合戦に参加した武士たちは軍忠状でこの合戦を「打出合戦」と表記している。たとえば、直義側として参加した九州阿蘇神社の神官阿蘇惟時、摂津の伊丹宗義、和泉の田代顕綱、播磨の広峰頼長らの軍忠状、尊氏側についた肥前の松浦秀の軍忠状も、この合戦を「摂津国打出浜合戦」「打出合戦」と記している（『大日本史料』六―一四、七四八頁）。

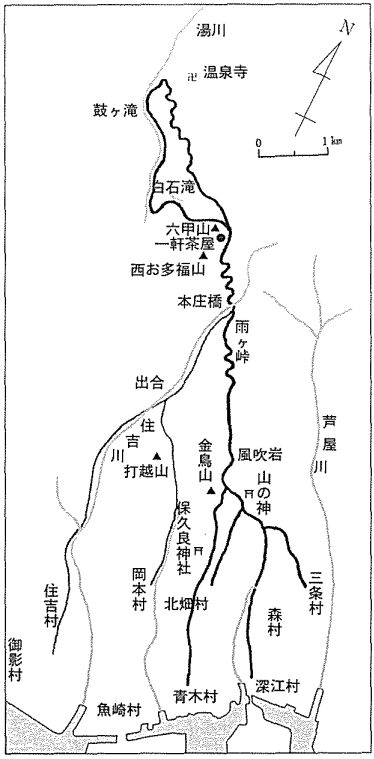
こうしてみると、この合戦は「打出合戦」とするのが妥当なように思える。しかし、今一つ、別の呼び方があった。この合戦があった当時、京都の醍醐寺の房玄という高僧が記した『観応二年日次記』（『続群書類従』）と呼ばれる日記がある。合戦があった翌日の二月十八日の記述によると、この日将軍尊氏の敗北を告げる早馬が京都に到着し、「雀松原合戦」の様子を知らせた。それによると、尊氏勢は兵庫、直義勢は雀松原・打出に陣を取り合戦が始まったというのである。『太平記』では尊氏側の薬師寺公義が潜んだはずの雀松原が、房玄の日記では直義勢の陣地となっているのである。

残念ながら、雀松原に誰が陣をとったのか、これ以上の史料は残されておらず、詳細は知りえない。ただ、これらの記事から、合戦の呼称は戦闘の時点では一定せず、どの場所の戦闘を重視するかによって、様々な

呼称があったのではないかと推測される。様々な呼称は時がたつにつれて淘汰され、一つの呼称となっていったのであろう。そう考えると後世の合戦の呼称は、中世の合戦の場所を必ずしも正確に伝えているとは限らない。先にみた湊川合戦などはそのよい例であろう。

湯山と芦屋・東神戸を結ぶ道　以上の経過の中で注目されるのは、畠山国清が東条から湯山（有馬温泉）経由で打出浜に南下してきたことである。『太平記』はそのルートについて詳しく記していないが、おおよそ現在の「魚屋道（ととやみち）」と呼ばれる諸ルートのうち、芦屋側に下りるルートがこれにあたると考えられる（田辺真人「魚屋道の往来―近世東六甲の山越え交通史―」）。

近世に入るとこのルートは、六甲山越のバイパスとして、森・深江・青木・北畑・中野・小路（しょうじ）・田辺（以上東灘区）・三条・津知（つち）（以上芦屋市）の本庄九カ村によって拡幅され、幹線道路であった船坂越の諸宿（小浜・伊丹・尼崎・生瀬（なまぜ）など）の権益を脅かした。そのため、



太線…芦屋側から有馬へ通じるルート
細線…住吉側から有馬へ通じるルート

図62　魚屋道（田辺真人「魚屋道の往来」掲載の地図をもとに作成）

船坂越えの諸宿は本庄九カ村を訴え、長きにわたって訴訟が続いたという経緯がある。

近世より以前、このルートについてふれた史料は、『太平記』以外に見あたらない。しかしおそらく、このルートは畠山国清の軍勢が移動するよりもずいぶん以前から整備されていたと思われる。その根拠として注目されるのが、本庄九カ村とかさなるように東神戸から芦屋にかけての地域にあった「山道(やまじ)荘」「山路(やまじ)荘」という荘園である。

この「山道」「山路」という呼称は、この地域に文字通り山越えの道が通じていたことにちなんだのであろう。この地域を通る山越えの道を想定するとなると、北の六甲山系に延びる道を想定する以外にない。

「山路荘」「山道荘」の名称は平安時代の末期から登場するから、この道も少なくとも平安末期には、すでに多くの人々が行き来する道として使われていたことになる。

4　内乱の終息へ

山路荘と内乱

南北朝内乱期、この山路荘には幾度か軍事費が課せられ、領主の興福寺がその免除を求める運動を起こしていたことが知られる。現在、残されている史料からは、①観応(かんおう)元年（一三五〇）十二月（『県史』七「大乗院文書」五、観応元年十二月六日付権大僧都公憲書状案）と②康安(こうあん)二年（一三六二）四月（同上七、康安二年四月二十一日付僧公憲書状案）の二度、興福寺は守護や幕府に対して軍事費負担の免除を要求している。①②の場合とも、山路荘に軍事費が課されたのは、免除要求がなされた時点からさほど遡らない

時期であろう。それではなぜ①観応元年十二月、②康安二年四月頃という時点で山路荘に軍事費が課されたのであろうか。

まず、①については先述した観応の擾乱との関係が考えられる。この時興福寺は摂津守護の赤松範資に対して、山路荘に課された「兵粮人夫」の免除を求めている。おそらく範資は直冬（直義の養子）鎮圧に向かう足利尊氏を迎えるために、山路荘をはじめとする諸荘園から人夫を徴発したのであろう。尊氏は十一月五日には兵庫に入り、京都に残った佐々木導誉を通じて、戦争遂行のため西国の寺社本所領の一時的な管理を認めるよう朝廷に要求するなど（『園太暦』観応元年十一月十六日条）、遠征の準備を進めている。当然、現地責任者である範資も、尊氏軍をサポートしないわけにはいかなかっただろう。

後の話になるが、赤松光範は南朝攻撃のため尼崎に在陣した将軍足利義詮に十分な物資の提供を行わなかったという理由で、摂津国守護職を更迭されている（『太平記』巻第三十六）。自領に進駐する将軍に対する奉仕は、守護にとってきわめて重要な意味をもっていたのである。そのことは同時に、軍隊の進駐が地域に様々な負担を強いたことを意味している。

山路荘の半済

では、②康安二年（一三六二）の場合はどのような事情があったのだろうか。この時興福寺は「半済」の停止を幕府に訴えている。「半済」とは守護や地域の軍事勢力が、荘園や国衙領の年貢の半分を現地の指令官が軍事費として差し押さえることを幕府が認める制度で、武士が荘園を浸食していく足場になったと考えられている。同じ日に興福寺は、摂津国武庫荘、西小屋荘の半済停止も求めていることから、尼崎、伊丹、東神戸一帯の範囲で荘園がいっせいに半済化された可能性がある。なぜこのようなこ

とが起こったのであろうか。

康安二年頃の西摂津の政治状況を考える上で、注目されるのは当時の摂津国守護職をめぐる情勢である。延文四～五年（一三五九～六〇）の間尼崎に進駐した足利義詮に対する接待の不備を理由に、赤松光範が摂津国守護を更迭されたことは先に述べたとおりである。この光範に代わって幕府の実力者佐々木導誉の嫡孫秀詮が摂津国守護となったのが、康安元年であった。つまり、西摂津の半済は義詮の尼崎進駐、赤松氏の更迭、佐々木氏の守護就任という一連の出来事と何らかの関係があったのではないかと推測されるのである。

仮説としては、（ア）義詮の尼崎進駐に伴い、尼崎周辺の西摂津に半済が適応された、（イ）近江国を拠点とし、摂津国にさしたる基盤を持たなかった佐々木氏が、摂津国守護就任と同時に、守護の経済基盤を確保するため半済を実施した、という二つが考えられる。現在のところ、両説とも史料的な裏付けを欠き、確かなことはわからない。しかし、いずれにせよ、半済が西摂津をめぐるこの時期の政治的な緊張と何らかの関係があったと考えるのが自然であろう。

そして、その緊張を突くように、南朝軍がこの地域に最後の侵入を試みるのである。

楠木正儀の進出と山路城・多田部城

康安二年（一三六二）八月、楠木正儀・和田氏の南朝軍は神崎川に進み、摂津国守護佐々木導誉の代官箕浦俊定と摂津武士の連合軍を撃破した。勝ちに乗る楠木勢の次の標的は、兵庫の赤松勢であった。『太平記』（巻第三十八）は楠木勢と赤松勢の合戦を次のように描いている。

和田・楠等只一軍ニ摂州ノ敵ヲ追落シテ勝ニ乗トイヘ共、赤松判官・信濃彦五郎兄弟、猶兵庫ノ北ナル多田部城ニ籠テ、兵庫湊河ヲ管領スト聞ヘケレバ、九月十六日、石堂右馬頭・和田・楠三千余騎ニテ、

兵庫湊川へ押寄セ、一宇モ不レ残焼払フ。此時赤松判官兄弟ハ、多田部・山路二箇所ノ城ニ籠テ、敵懸ラバ爰ニテ利ヲセント待懸ケルガ、楠イカヾ思ヒケン、軈テ兵庫ヨリ引返シケレバ、赤松出合ニ不レ及、野伏少々城ヨリ出シテ、遠矢射懸タル計ニテ、墓々敷軍ハ無リケリ。

つまり、楠木勢を迎え撃つ赤松勢は「多田部」「山路」の二つの城に籠もったが、湊川まで進攻した楠木勢と直接衝突はなく、赤松勢が歩兵を城から出して遠矢を射るに留まったというのである。では、この二つの城はどこにあったのだろうか。

まず「多田部」は再山の「再」を指すと考えられる。『兵庫県の地名』によれば、多田部城は再山の山頂の大龍寺の境内を利用して構築され、現在も山頂に残る遺構を城跡と推定している。再山には兵庫と湯山街道を南北に結ぶ「再越」とよばれるルートが通っており、交通の要衝でもあった。

写真100　大龍寺（中央区）

「山路城」はその名前から考えて、山路荘付近にあったのであろう。『本山村誌』は、JR摂津本山駅の西八〇〇メートル付近、本山中学校付近に本郭を想定している。同所は明治七年（一八七四）の鉄道工事で景観が大きく変化し、遺構等を認めることはできないが、付近に「的場」「城ノ前」といった字があったことから、同所を山路城と考えたのである。さらに『本山村誌』はJR付近にあったこの城とセットになる、戦時の城を岡本の五百山に求めている。

しかし、同書の見解に問題がないわけではない。「的場」「城ノ前」という字名だけで、そこに城があったとはいえないし、史料上に一度しか名を現さない城が、「的場」などの施設をもっていたのかも疑問である。また、五百山に山城があったとする根拠も明らかではない。このように、南北朝期の多くの城と同様、山路城の位置も確定することは難しい。唯一いえることは、『太平記』によれば、湊川まで進んだ楠木勢と城に籠もる赤松勢の間にはかばかしい戦闘がなく、赤松勢が城から弓射兵を出して遠矢を射させたというから、山路城は楠木勢の進路からやや距離を置いたところにあったのではないかということである。

この時楠木勢は摂津国守護佐々木氏の守護代を京都に敗走させ、湊川にまで進攻した。しかし、『太平記』もいぶかしがるように、突然兵庫から兵を引いた。その理由は明らかではないが、これ以後南朝勢が兵庫に攻め込むことはなかった。こうして、西摂津の内乱も次第に鎮静化していったのである。

第二節　細川氏と赤松氏

1　摂津国と播磨国の守護

細川氏の惣領家と庶流家

室町幕府の三代将軍足利義満は、明徳三年（一三九二）に南北両朝の統一を実現させた。一方、明徳二年の明徳の乱で山名氏を、応永六年（一三九九）の応永の乱で大内氏を討伐するなど、強大化しつつあった守護勢力を抑圧し、守護の京都在住を義務づけた。これにより、守護は幕府の一員であることにより分国支配を保証され、将軍は守護勢力を代表する管領以下宿老会議の支持と制約のもとに権力を行使する相互依存と相互抑制の体制が成立した。これを、室町幕府―守護体制と呼んでいる。

この時期には、守護の管国もほぼ固定化してくる。神戸市域に関連する範囲では、摂津国守護は細川氏、播磨国守護は赤松氏である。両氏は京都に在住して幕府の要職につき、他の国の守護職も兼帯した。守護が在京したというより、諸大名が在京して幕政を担い、同時に諸国の守護職を兼ねていたといったほうがわかりやすいかもしれない（吉田賢司「室町幕府による都鄙の権力編成」）。また、細川氏や赤松氏は、嫡流家（惣領家）ばかりでなく、庶流家もさまざまなかたちで幕府とつながりをもっていた。

摂津の守護には、細川氏の惣領家当主が任じられた。惣領家は、初代頼元以来当主が代々右京大夫を官途としたので、その唐名にちなみ京兆家と呼ばれる。京兆家当主は管領に任じられ、斯波氏、畠山氏とと

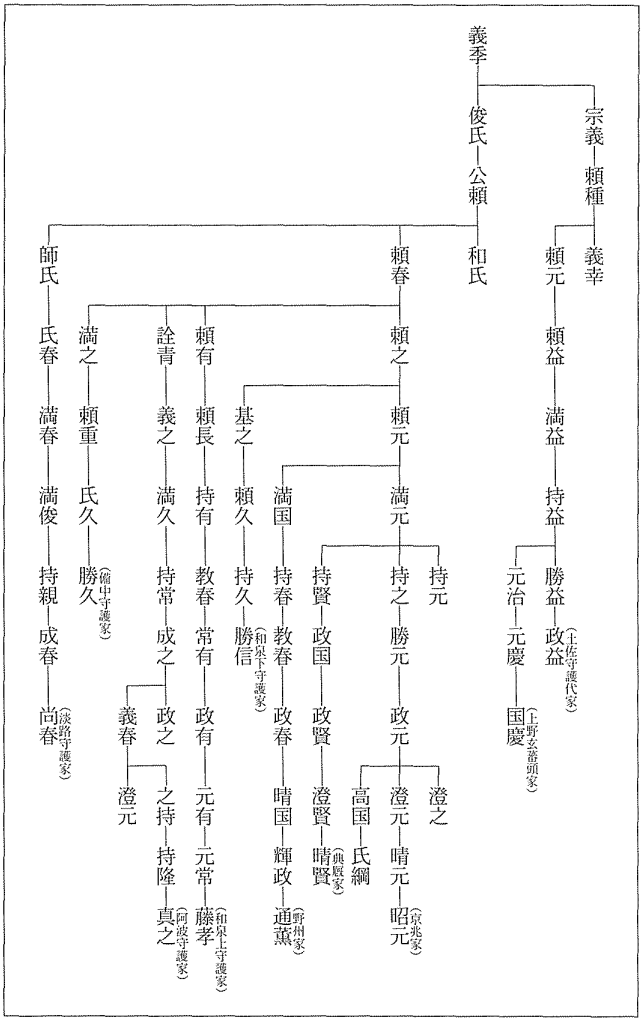


図63　細川氏略系図
（末柄豊「細川氏の同族連合体制の解体と畿内領国化」を参考に作成）

もに三管領家を構成した。当主はまた、摂津のほか丹波、讃岐、土佐の守護職を兼ねた。惣領家は、頼元ののち、満元、持元、持之、勝元と続き応仁・文明の乱にいたる。

有力庶流家としては、阿波守護家（讃州家）、淡路守護家、備中守護家、和泉半国守護家（上守護家・下守護家の二家）、典厩家、野州家がある。先の五家はそれぞれ各国の守護職を相承し、典厩家は摂津西成郡、野州家は伊予宇麻郡の守護であった。このように、細川氏では有力庶流家も守護職を保持しているのが大きな特徴である。細川氏は、これら諸家が同族連合を形成し、幕府内において他氏に優越する地位を保ちつづけたのである（小川信『足利一門守護発展史の研究』、末柄豊「細川氏の同族連合体制の解体と畿内領国化」）。

細川氏の摂津支配

細川京兆家が摂津守護に任じられたと述べたが、ことはあまり単純ではない。頼元が摂津守護に再任された永徳三年（一三八三）の段階で、京兆家が管轄していたことが明確なのは島上、島下、豊島、八部および川辺郡南部の五郡にすぎない。その後、神戸市域およびその周辺との関連でいえば、菟原郡は応永五年（一三九八）に、武庫郡は同二十六年になって管轄下にあることが確認できる。最終的に京兆家が全域を支配するに至るのは、文安六年（一四四九）頃のことである。ただし、全域といっても有馬郡は南北朝期から赤松氏の管轄であり、西成郡は典厩家が守護なので、ここには含まれない（今谷明『守護領国支配機構の研究』）。

細川氏は摂津を支配するために守護代、小守護代・郡代などをおいた。守護代は在京していたらしく、現地支配は小守護代などが担当した。応仁・文明の乱頃までの守護代として名がみえるのは、長塩氏、十河氏、香西氏、寺町氏、秋庭氏、内藤氏、薬師寺氏である。このうち、寺町・秋庭は備中、内藤は丹波、薬師寺は

摂津を本拠とし、長塩・十河・香西は讃岐・阿波など四国の出身である。つまり、薬師寺氏以外摂津出身者はいない。また、小守護代、郡代にも摂津国人はほとんど見えないという。摂津には池田氏（本拠・現大阪府池田市）、伊丹氏（現伊丹市）、吹田氏（現大阪府吹田市）、芥川氏（現大阪府高槻市）、三宅氏（現大阪府茨木市）らの有力国人がおり、細川氏の被官になっているのだが、彼らは守護代以下に任用されていないのである（今谷前掲書）。茨木氏（現茨木市）が丹波国の段銭奉行に任じられた例はあるものの、これも摂津国ではない。当主の側近にあって庶政を担当し、守護代等に任用される被官を内衆というが、細川氏の内衆は、南北朝期に一貫して細川氏が守護職を握り、勢力を扶植してきた阿波・讃岐などの出身者を中心として構成されていた。摂津支配にあたっても、細川氏は彼らを守護代以下に登用したのである。

赤松氏の惣領家と庶流家

赤松氏の惣領家は、円心の三男則祐を祖とする。惣領家は、則祐のときに備前守護職を兼ね、その子義則の代に美作守護職を与えられて播磨・備前・美作三カ国の守護職を兼帯するようになった。則祐・義則は摂津国有馬郡の守護職も保持していたが、応永元年（一三九四）までに義則の弟義祐に代わった。この義祐の家系を有馬家（氏）という（本節2項参照）。また、義則は赤松氏として初めて幕府の侍所頭人に任じられ、赤松惣領家は一色、京極、山名の三氏とともに四職家の一角をしめるにいたった。しかし、次代の満祐が起こした嘉吉の乱により、惣領家はその地位を失うことになる。

赤松氏には、有馬家のほかにも、七条家、春日部家、大河内家などの庶流家があった。これらの庶流家は、近習として将軍に仕えた。近習とは、将軍に近侍し、平時は将軍の身辺警護を担当し、戦時には親衛軍の役割を果たす者のことであり、守護家の庶流や有力国人らによって構成された。また、近習は、幕府直轄領で

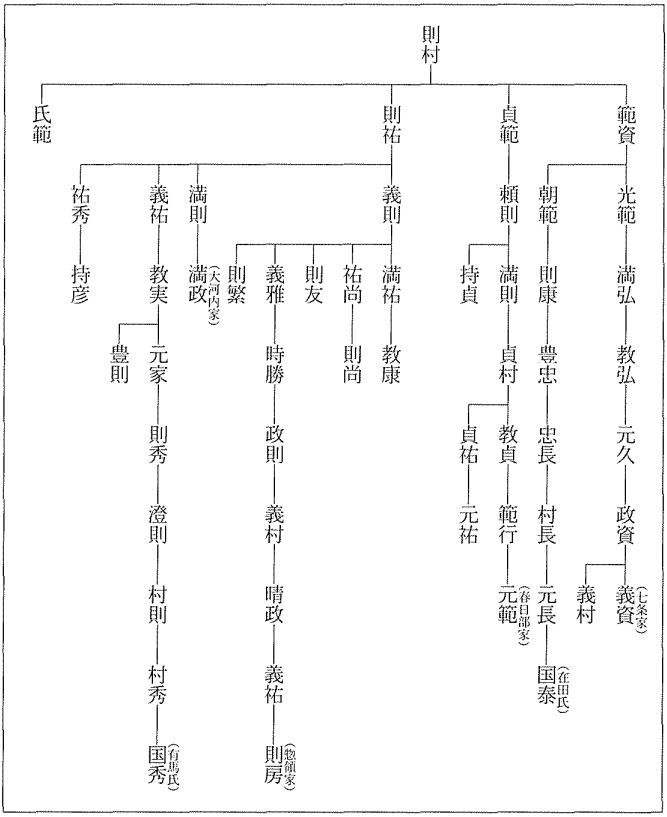


図64　赤松氏略系図（『播磨置塩城跡発掘調査報告書』所収系図を参考に作成）

ある御料所の代官職に補任（ぶにん）され、それを自らの経済基盤にするとともに幕府の財政を支えた。近習は、将軍権力の経済的、軍事的基盤であった。

赤松氏の庶流家は、有馬家以外守護職をもたない。有馬家にしてもわずか一郡である。彼らは、自らの存立のために幕府への依存を強めざるをえないのである。したがって、庶流家は、赤松氏の一族で

あるといっても惣領家からは自立した立場をとることになる。2項以下でみるように、彼らは惣領家とは異なる行動をとり、惣領家をおびやかすことも少なくなかった。このような庶流家の存在が、ときとして惣領家の不安定要因となるのである。

赤松氏の播磨支配　赤松氏による播磨支配のしくみは、十四世紀末期、義則の頃に整えられた。全一六郡が東西各八郡に分けられ、それぞれに守護代がおかれたと考えられているが、東播磨守護代についてはまったくわからない。西播磨守護代には、広瀬（宍粟市）を本拠とする宇野氏が任じられた。宇野氏は赤松氏の同族である。その後、守護代所は一時期石見（たつの市。太子町とする説もある）に移り、赤松氏の一族が補任されたが、再び広瀬の宇野氏が守護代となり嘉吉の乱をむかえる。

また、義則は小河氏を国衙目代職に任じた。小河氏は国衙在庁の一員であったと推測されており、これによって義則は国衙機構を掌握したのである。小河氏が職務を行う役所は坂本（姫路市）にあり、段銭・公役の徴収・免除、寺社本所領の統轄、商業統制などを担当した。それに対し、守護代の職掌は、被官人に対する軍事指揮、所領相論における裁定の執行、犯罪人の検断などであった。つまり、播磨の支配機構は、守護代系列と目代系列の二系統をもつものとして整備されたのである（伊藤邦彦「播磨守護赤松氏の〈領国〉支配」）。その後、検断権が守護代の権限から分離され、浦上氏が検断奉行となっている（「東寺二十一口方評定引付」永享七年二月八日条）。浦上氏は、播磨の浦上荘（たつの市）を本貫とする国人であり、惣領家当主が侍所頭人に任じられたときは、その下で所司代をつとめた。

赤松氏にとって播磨は出身国であり、室町幕府成立当初から一貫して守護職を保持した。したがって、赤

松氏の被官団は播磨の国人を中心に構成されており、備前守護代に任じられた小寺氏などをふくめ、要職には同族とともに播磨出身者を多く登用したのである。

2　有馬郡守護赤松有馬氏

赤松有馬氏の成立

摂津国有馬郡の守護が赤松惣領家の義則から弟義祐に代わったのは、嘉慶二年（一三八八）から応永元年（一三九四）の間のことである。その後、一時期を除いて義祐の子孫が代々有馬郡守護に任じられた。これにより、義祐に始まる家系は赤松有馬氏、あるいは赤松有馬家と呼ばれる。しかし、有馬氏の当主の名や守護としての在任時期については不確定な部分があり、日本史辞典の類でも記述が一定しない。この項では、系譜の整理にも留意しながら、赤松有馬氏の歴史をみていきたい（以下、高田義久『有馬郡主　赤松有馬氏年譜』、小林基伸「有馬郡守護について」参照）。

応永十六年閏三月、義祐は清水寺（加東市）に有馬郡中荘（三田市）の田地二町を寄進した（『県史』二「清水寺文書」一五五）。これは、永徳三年（一三八三）に赤松義則が寄進した田地の再寄進であった。義則は、南朝方に属し清水寺で敗死した赤松氏範父子の菩提を弔うため、追善料田として中荘の田地を清水寺に寄進したのである（同上一一四）。この田地は、氏範の官名である弾正少弼（弾正台の役職名）にちなみ、霜台田と呼ばれる。霜台とは、弾正台の唐名である。以後、歴代の有馬郡守護は、代替わりごとに霜台田の寄進状を清水寺に与えた。つまり、再寄進とは代替わりにともなう安堵であり、それによって、従来の関係が今後

も継続することを互いに再確認するのである。そして、その寄進状は、有馬郡守護の名前を知るうえで重要な手がかりを私たちに与えてくれるのである。

有馬教実と「持家」

義祐は応永二十八年（一四二一）九月に死亡し（『看聞日記』九月二十六日条）、その跡は教実が継いだ。教実が有馬郡守護であることを初めて確認できるのは、永享三年（一四三一）、幕府が、摂津守護細川持之、播磨守護赤松満祐とともに教実に多田院（川西市）御家人の退治を命じた史料である（『県史』九「御前落居記録所収文書」一）。日本史辞典のなかには義祐の次に則友の名をあげるものもあるが、これは間違いである。教実は、義祐の死をうけて有馬郡守護を継いだと考えられる。

ところで、従来、永享～嘉吉（一四二九～四四）頃の有馬家当主の名は「持家」とされてきた。しかし、「持家」は系図だけにみえる名前であり、同時代の史料にみえる当主の名は教実である。当時、守護クラスの武士が将軍から一字拝領することは珍しくなく、足利義持に仕えていた「持家」が義教の就任により教実に改名した可能性も考えられる。しかし、確実な史料がないかぎり、義祐の後嗣は教実と呼ぶのが正確なのである。教実は、宝徳二年（一四五〇）正月に他界し（『康富記』正月二十一日条）、その跡を元家が継いだ。元家は、享徳元年（一四五二）七月、霜台田を清水寺に再寄進している（『県史』二「清水寺文書」一七〇）。

近習赤松有馬氏

このように、義祐、教実、元家と赤松有馬氏当主は三代続けて有馬郡守護に補任されたが、当主本人は有馬郡にいたわけではない。当主は通常京都にいて、近習として将軍に仕えていた。永享九年（一四三七）に将軍足利義教の姫君が誕生したときには、教実の屋敷が御産所になっており、義教との緊密な関係を窺うことができる（「御産所日記」『群書類従』）。嘉吉の乱（一四四一年）のおりも、教実は惣

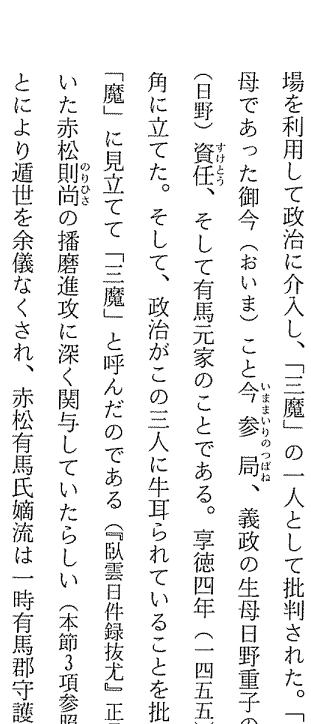

丹日之並雲来奉詰不及天下政夏雲曰世有三魔
之説洛所謂落書者也蓋三人形立之將頃盗政出
於魔也御今有馬烏丸也云云予曰烏丸之爲盗殿後
之体也可謂妙矣——

写真101　『臥雲日件録抜尤』
享徳四年正月六日条
（国立国会図書館蔵）

領家に従わず、幕府の追討軍に参加している（本節3項参照）。

元家も将軍足利義政の近くに仕え、「室町殿無双之寵人也」といわれた（『師郷記』康正元年十二月十四日条）。元家はその立場を利用して政治に介入し、「三魔」の一人として批判された。「三魔」とは、近習大館満冬の娘で義政の乳母であった御今（おいま）こと今参局（いまいりのつぼね）、義政の生母日野重子のいとこであり、義政の養父であった烏丸（からすま）（日野）資任（すけとう）、そして有馬元家のことである。享徳四年（一四五五）正月、ある者が三人の像を描いて京の街角に立てた。そして、政治がこの三人に牛耳られていることを批判し、それぞれの名の語尾にある「ま」を「魔」に見立てて「三魔」と呼んだのである（『臥雲日件録抜尤』正月六日条）。事実、元家は、この頃進行していた赤松則尚（のりひさ）の播磨進攻に深く関与していたらしい（本節3項参照）。同年十二月、元家は則尚に加担したことにより遁世を余儀なくされ、赤松有馬氏嫡流は一時有馬郡守護職（しき）を失うこととなった。元家は、京都から姿をくらまし、伊勢（いせ）国で僧形になったという（『師郷記』十二月十四日条）。

有馬道衍・直祐

遁世した元家の跡は、有馬道衍（どうえん）に与えられた。道衍は、「有馬系図」（『続群書類従』）などにみえる持彦と考えられている。ふつう持彦は義祐の弟祐秀の子とされているが、系図によっては義祐の子息とするものもあり一定しない。いずれにせよ、義祐―教実―元家と続いてきた流れとは別の

系統に赤松有馬氏の惣領職と有馬郡守護職が与えられたのである。

道衍も、康正二年（一四五六）四月、霜台田を再寄進した（『県史』二「清水寺文書」一七九）。同年、道衍は有馬郡の造内裏段銭を幕府に納めている（「康正二年造内裏段銭并国役引付」『群書類従』）。幕府が賦課する段銭を管轄地から徴収し、幕府に納入するのは守護の役割であった。また、長禄四年（一四六〇）には、八多荘（北区八多町）の松原家貞跡に対する細川左京亮の支配を退け、領主である実相院に引き渡すよう幕府から命じられ、その執行を守護代の上月六郎に命じている（『県史』九「実相院文書」八・九）。所領争いに関する幕府の裁定を現地で執行させるのも守護の権限である。

道衍の守護在職は寛正六年（一四六五）八月まで確認され、翌年二月までの間に子息直祐が跡を継いだ。直祐も、寛正六年九月の将軍足利義政の南都下向や（『親元日記』九月二十一日条）、翌文正元年三月の伊勢参宮に御供衆として供奉するなど（『斎藤親基日記』三月十七日条）、義政に近侍していた。しかし、当初は貧乏のため幕府に出仕できず、道衍が本領の丹波国郡家荘を売却して費用を捻出したという（『蔭涼軒日録』寛正四年十二月二十九日条）。

道衍の逐電・元家の復権と誅殺

文正元年（一四六六）九月、道衍が京都から逐電した。義政の側近であった政所執事伊勢貞親と蔭涼軒主季瓊真蘂が足利義視（義政弟）の暗殺を計画し、それを知った細川勝元らが義政に処分を求めた。そこで、貞親と真蘂らは急遽近江方面に逃走した（文正の政変）。貞親派であった道衍も、彼らとともに京都を逃れたのである（『大乗院寺社雑事記』九月七日条、「応仁記」『群書類従』）。

この後、元家が再び表に現われてくる。遁世した元家の赦免を求める動きは、道衍逐電以前の寛正六年

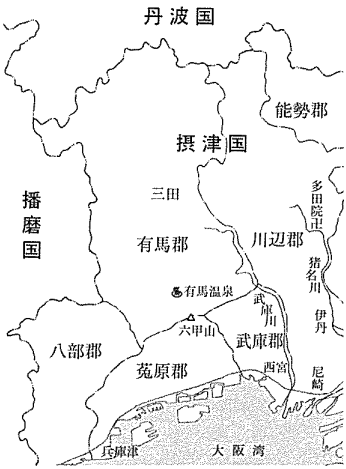


図65　有馬郡の位置
（『国史大辞典』「摂津国」項を参考に作成）

（一四六五）九月頃にあり、そのときは義政が拒否している（『陰涼軒日録』九月十八日条）。その後、文正二年正月、「赤松之在馬」が義政によって赦免された（『大乗院寺社雑事記』正月十九日条）。この「在馬」については、道衍の失脚により元家が復権したという理解と、道衍が赦免されたとみる理解がある。いずれにせよ、応仁・文明の乱が始まった頃には元家は復権しており、東軍に属していた（「応仁記」）。

復権した元家は、赤松惣領職の獲得を策謀し、足利義視に接近した。赤松惣領家は、嘉吉の乱（一四四一年）でいったん滅亡したが、長禄二年（一四五八）十一月に赤松政則を当主として再興が許されていた。元家は、政則からその地位を奪おうとしたのである。そのため、応仁二年十一月、元家は足利義政の命をうけた赤松政則によって誅殺された（『後法興院記』十一月十一日条など）。

御供衆有馬則秀　その後、文明二年（一四七〇）三月段階で、元家の子息則秀の有馬郡守護在職が確認できる（『県史』二「清水寺文書」一九五）。直祐就任以降の経緯については未解明な点が多いものの、再び教実―元家の系統が守護に補任されたのである。

則秀もまた京都におり、御供衆に加わっていた。御供衆とは、将軍に近侍し、御成の御供や陪席にあたる者のことである。寛正（一四六〇～六六）の頃に整備され、三番に編成されて交替で御供をつとめた。御供衆

は幕府内において最上位の格式ではなかったが、将軍の身辺に親しく仕える点において名誉ある地位であった。（二木謙一『中世武家儀礼の研究』）。

則秀の御供衆としての活動は、文明十年（一四七八）二月に大御所足利義政の細川政元亭御成の御供（『後鑑』文明十年二月二十八日条所収「伊勢家書」）、同十三年十月に義政の鹿苑寺御成の御供などがある（『親元日記』十月十五日条）。また、将軍足利義尚臨席の犬追物にもしばしば参加し、射手をつとめた（同上文明十年七月七日条、『後鑑』文明十三年三月十六日条所収「伊勢家書」など）。則秀は、長享元年（一四八七）九月、義尚の近江出陣にも御供衆として随行し（「長享元年九月十二日常徳院殿様江州御動座当時在陣衆着到」『群書類従』）、長享三年四月におこなわれた義尚の葬儀でも棺のそばに供奉している（『蔭涼軒日録』四月九日条）。

有馬慶寿丸の惣領家家督就任

則秀の代におけるもっとも重要なできごとは、嫡子慶寿丸（澄則）の赤松惣領家当主擁立である。赤松惣領家当主の政則は、文明十五年（一四八三）十二月、播磨と但馬の国境で山名軍に大敗し、山名軍の播磨侵攻を許した（『大乗院寺社雑事記』文明十六年正月十一日条）。そのため、翌年二月、浦上則宗らの有力被官は、政則を追放し慶寿丸を家督とすることを幕府に願い出た（『県史』九「蜷川家文書」一三）。願いは認められたのだが、その決定は、大御所の義政が知らないままに将軍義尚とその母日野富子がくだしたものであったらしい。浦上則宗は、赤松氏の被官という立場ながら、将軍周辺の厚い信任をうけていた。また、慶寿丸の擁立は当然則秀の同意のもとに行われたはずである。義尚や富子への働きかけも、則宗と則秀が中心となって進められたことは想像に難くない。

しかし、慶寿丸の赤松惣領家当主は長く続かなかった。追放された政則は、上洛して義政を頼った。その

結果、慶寿丸に対する惣領職安堵の文書は謀書として退けられ、政則の家督復帰が認められたのである。こうして、赤松有馬氏による惣領職獲得は、またも不成功に終わることとなった。

この間、山名勢の播磨侵攻にともなう混乱は有馬郡にも及び、在田氏などが郡内に攻め込んできた。在田氏は赤松氏の庶流家の一つで、この頃には山名氏と手を組み、別の惣領家当主を擁立していた。また、有馬郡には、「以前之在(有)馬右馬助」も山名と同心して打ち入ったという。この右馬助(うまのすけ)は、元家系に守護職を奪われた道衍・直祐の系列に属する人物と推測できる。あるいは、直祐当人の可能性もある。おそらく、山名勢の侵攻に乗じて、有馬郡の回復をはかったのであろう。文明十六年十月、赤松政則が京都を発って有馬郡に入り、翌春まで駐留した。有馬郡の混乱は、これによって収束したものと思われる（以上、『大乗院寺社雑事記』三月一日・八日条、『五山文学新集』五「別所則治寿像賛」）。

有馬氏被官の澄則擁立

浦上則宗らによる政則追放と慶寿丸擁立は、被官たちが当主を選ぶ状況を示している。当主の地位は、被官たちの支持があって初めて保たれるのである。赤松有馬氏でも、延徳(えんとく)三年（一四九一）正月、被官たちが則秀に背き、子息澄則を擁して有馬郡に下るという事件が起こった（『蔭涼軒日録』正月二十三日条）。澄則はこの年十四歳である。詳しい事情は不明だが、則秀のもとにとどまった被官もいるので、被官衆の内部にも対立があった可能性がある。しかし、則秀はその後も当主の座に留まり、澄則とともに京都で活動している。則秀は、明応(めいおう)八年（一四九九）五月以前に出家し、耕雲軒と号した（『鹿苑日録』明応八年五月十七日条）。おそらく、出家にともなって家督が澄則に譲られたのであろう。同年七月には、澄則が清水寺に霜台田を寄進している（『県史』二「清水寺文書」二四七）。なお、澄則の存在は、文亀(ぶんき)三年（一

五〇三）七月まで確認できる（『鹿苑日録』七月十七日条）。

久留米有馬氏系図

以上、義祐から澄則にいたる赤松有馬氏の系譜と事績をたどってきた。では、澄則以降はどうであろうか。『寛政重修諸家譜』や『続群書類従』に収められた有馬氏系図では、義祐から久留米有馬氏の初代豊氏にいたる系譜がつぎのようになっている。

義祐―持家―元家―則秀―澄則―則景―重則―則頼―豊氏

このうち、義祐から澄則にいたる五代は、持家を教実と改めれば、これまでみてきた赤松有馬氏嫡流と一致する。六代則景は、管見のかぎり史料に現われない。つぎの重則は、将軍足利義輝のもとで外様詰衆として名がみえる有馬源次郎重則であろう（『後鑑』永禄六年五月是月条所収「光源院殿御代当参衆并足軽以下衆覚」）。則頼は豊臣秀吉に仕え、のち徳川家康について三田城主となった。その子息豊氏が元和六年（一六二〇）に久留米（福岡県久留米市）に移封され、久留米有馬氏が成立する（『寛政重修諸家譜』）。従来はこの系図が有馬氏系図として流布しており、これが赤松有馬氏の嫡流であると考えられてきた。しかし、事実はそうではない。史料を丹念に調べると、澄則に連なる別の流れがみえてくるのである。

赤松有馬氏嫡流の復原

澄則以後の赤松有馬氏嫡流を探る手がかりはいくつかある。一つは、有馬郡守護としての権限を行使していること。これには、清水寺に対する霜台田の保証も含まれる。また、戦国時代の武家では、代々同じ幼名や通称を名乗るのが一般的であった。澄則の幼名は慶寿丸、通称は又次郎である。さらに、官途名も代々同じものを名乗り、変化も一致することが多い。則秀は初め民部少輔を名乗り、ついで刑部大輔、それから出羽守と変わっている。澄則も刑部大輔であった。

これらを手がかりに史料をみていくと、まず、永正十五年（一五一八）に又次郎村則がいる（『県史』八「宝鏡寺文書」三三など）。村則の幼名も慶寿丸である（同上三二）。村則は、大永六年（一五二六）に湯山阿弥陀堂（北区有馬町）の諸公事を免除している（『県史』一「善福寺文書」一）。管轄内寺院の諸公事免除は守護の権限である。

つぎに、天文九年（一五四〇）十二月に霜台田を寄進した又次郎がいる（『県史』二「清水寺文書」三二九）。これは、村則ではなく、「宝鏡寺文書」にみえる有馬又次郎村秀であろう（「京都大学文学部古文書室架蔵写真帳」年月日未詳有馬村秀書状）。村秀の官途は民部少輔である（「同」天文十三年有馬村秀書状）。村秀は、永禄二年（一五五九）五月まで確認できる（『言継卿記』五月一日条）。その後、永禄十一年十月に、国秀なるものが清水寺に霜台田の年貢進納を保証している（『県史』二「清水寺文書」三九八）。国秀の官途は出羽守であった（『県史』八「宝鏡寺文書」五六）。国秀は、元亀二年（一五七一）に湯山阿弥陀堂の諸公事を免除している（『県史』一「善福寺文書」五）。

以上をまとめると、澄則以降に「澄則―村則―村秀―国秀」という系譜が復原できる。それぞれが父子関係であるという確証はないが、彼らこそが赤松有馬氏嫡流の歴代であった。

『寛永諸家系図伝』所収の荒木系図によると、三田城の有馬国秀は織田信長に属した荒木村重によって誅されたという。赤松有馬氏嫡流は、織田政権による摂津平定の過程で滅亡し、庶流であった重則の流れが統一の時代を生き延びて久留米藩主となった。従来知られている有馬氏系図は久留米有馬氏の由来を示すものであるから、そこでは村則以下の嫡流は抹消されてしまったのである（第十章第一節参照）。

3　嘉吉の乱と西摂・東播

赤松満祐下国事件

ここで再び話を室町期に戻そう。将軍権力を確立させ、室町幕府を安定に導いた足利義満は応永十五年（一四〇八）に病死し、四代将軍義持の治世が始まった。幕府政治のあり方は、将軍の意思と管領以下の宿老会議とが相互に規制しあう関係のなかで推移するが、義持が没する正長元年（一四二八）正月までの義持執政期は、宿老会議が最も有効に機能していた時期とされる。その例として知られるのが、赤松満祐の下国事件である。

応永三十四年九月、赤松惣領家の当主義則が死去した。この機に、義持は播磨を没収して御料国とし、寵臣の赤松持貞（春日部家）に与えようとした。再三の懇請を退けられた嫡子満祐は、播磨に下り合戦の準備を進めた。このとき、幕府内では諸大名が一揆して持貞の罪を訴え、持貞は自害に追い込まれた。この後、満祐は管領畠山満家の尽力によって幕府に復帰することができた。強権的な将軍権力の行使に対し、諸大名が一致してその撤回を実現させたのである（青山英夫「応永三十四年、赤松満祐下国事件について」）。こうして事態は平穏に復したが、この事件はやがて起こる嘉吉の乱の予兆をなすものであった。

足利義教の強権政治

義持の没後は、足利義教が将軍の座についた。義教は、専制的な政治を行い管領や宿老を抑圧・排除したようにいわれるが、これは正しくない。義教のときにも宿老会議は開かれていたし、管領も機能していた。しかし、義教の権力が確立してくる時期に宿老があいついで死去あるいは隠退

し、宿老会議の機能が低下する一方、奉公衆や奉行衆といった直轄軍や官僚機構が整備されてきたことにより、義教の専制的側面が強化されてきたのである（川岡勉『室町幕府と守護権力』）。

ともあれ、当時の人びとが義教の行動におびえたのは事実である。義教は、武家・公家・寺社の区別なく峻厳な態度で臨み、敵対する勢力を激しく弾圧し、少しでも不遜な態度をとるものがあれば容赦なく処罰を加えた。まさに「万人恐怖」の世であった（『看聞日記』永享七年二月八日条）。

義教は、大名家内部にも深く介入した。斯波家（三管領家）、畠山家（同）、京極家（四職家）、山名家（同）、伊勢家（政所執事）では家督を更迭されたり、相続者を変更させられたりした。また、一色義貫（四職家）と土岐持頼（伊勢半国守護）は、大和出陣中、上意討ちにより命を落した。このように、主だった大名家で、義教の干渉をまぬがれていたのは細川氏と赤松氏くらいであった。

嘉吉の乱の始まり　赤松満祐と義教の関係は、当初は良好であった。満祐は、義教が将軍となった正長元年（一四二八）に侍所頭人に再任され、徳政一揆の鎮圧に活躍した。室町邸で催される連歌会には必ず満祐が参仕を命じられ、永享四年（一四三二）八月には義教が播磨に下向し、書写山に参詣したりしている（『県史』四「寺社縁起類」（播磨国）二六「鎮増私聞書」永享四年条ほか）。しかし、義教は、その一方で赤松氏庶流を重用した。とくに重要なのは、大河内家の満政と春日部家の貞村である。彼らは近習として将軍に直属し、その寵愛をうけていた。

永享九年二月、義教が赤松満祐から播磨と美作を召し上げるとの噂が流れた（『看聞日記』二月九日条）。同十二年三月には赤松義雅（満祐弟）の所領がことごとく没収され、満祐と細川持賢、赤松貞村に分与された。

貞村に与えられた昆陽野荘（伊丹市）は、勲功の賞として拝領したものを赤松義則が義雅に譲与した由緒ある所領であった。満祐はこれを惣領家に残すよう懇請したが、義教は許さなかった（『建内記』永享十二年三月十七日条）。義持による播磨没収の記憶をもち、他大名家の状況を知る満祐が、守護職没収の恐れを抱いたとしてもふしぎではない。こうして、満祐は徐々に追いつめられていった。この頃世間では、満祐の身が危ないとの風評が広がっていたという（『上郡町史』第三巻「公名公記」永享十二年六月二十一日条）。

嘉吉元年（一四四一）六月二十四日、満祐の嫡子教康が赤松邸に義教を迎え、戦勝を祝す宴を開いた。一連の反幕府勢力平定を祝し、連日諸大名が義教の御成を仰いで祝宴を催していた頃である。満祐は前年から狂乱と称して幕府に出仕しておらず、赤松氏では教康が将軍を招いたのである。宴も進んだ頃、甲冑を着けた武者が乱入し、たちまちに義教を殺害した。同席した諸大名らは、あるいは即座に逃げ出し、あるいは応戦して落命する者もいた。やがて、満祐・教康は自邸に火を放ち、義教の首を掲げて播磨に下っていった。義雅ら一族や被官人たちも屋敷を焼き、これに従った。しかし、満政や貞村、有馬教実らは京都に留まり、満祐に同道することはなかった（『建内記』六月二十四日条ほか）。

追討軍の派遣と兵庫の合戦

播磨に下った満祐は、書写坂本（姫路市）に本陣を定めた。幕府の追討軍は、義教の葬儀などで進発が遅れ、第一陣が出発したのは七月十一日であった。山陽道方面の大手軍は、細川持常（阿波・三河守護）を総大将として、同基之（和泉半国守護）、同満俊（淡路守護）ら細川氏一族、それに赤松氏庶流の貞村、満政、教実、教弘（七条家）らである（『上郡町史』第三巻「東寺執行日記」嘉吉元年七月十一日条ほか）。搦手軍として、山名持豊（法名宗全、但馬・備後守護）、同教之（伯耆守護）ら山名氏一族が但

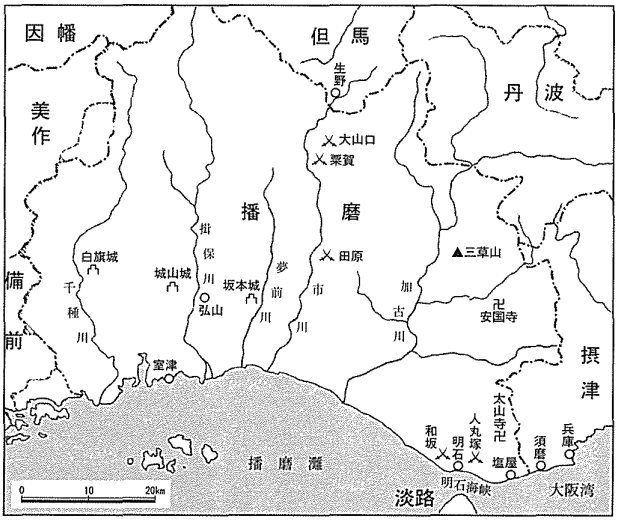


図66　嘉吉の乱関係地図（『兵庫県史』嘉吉の乱関係図をもとに作成）

馬方面から攻め入ることになった。搦手軍が京都を発向したのは七月二十八日である（同上嘉吉元年七月二十八日条ほか）。

七月二十六日頃の段階で、細川持常や赤松貞村らは西宮に留まっていたらしい（『上郡町史』第三巻「公名公記」嘉吉元年七月二十六日条）。大手軍が本格的な攻勢に出るのは、八月十九日の塩屋関（垂水区）焼き討ちからである（『建内記』嘉吉元年八月二十一日条）。この間、大手軍は兵庫にも駐留していた。七月下旬には、赤松氏が播磨から軍勢を派遣し、兵庫に火を放っている（『県史』九「細川家文書」一）。同じ頃、赤松勢が同士討ちをし、多くの犠牲者を出したのも兵庫でのことらしい（『建内記』嘉吉元年七月二十五日条。第九章第二節1項参照）。八月十七日には、細川持之の催促をうけた細川教春（和泉半国守護）の軍勢が兵庫に着陣している（『県史』九「細川家文書」三）。

塩屋関を焼き討ちした大手軍は、八月二十四日から二十六日にかけて人丸塚から和坂（かにがさか）（明石市）のあたり

で赤松軍と戦い、赤松軍は坂本に撤退した（『県史』九「吉川家文書」二三ほか）。八月二十六日、赤松貞村は太山寺に対し、祈禱の礼として土地を寄進している（『県史』二「太山寺文書」四七）。太山寺がある伊川荘は赤松春日部家の所領であった（第九章第二節2項参照）。貞村は、太山寺に戦勝祈願の祈禱を依頼していたのであろう。

赤松軍の本陣である坂本は、山名軍によって九月初めに攻め落とされた。満祐父子らは城山（きのやま）城（たつの市）に立て籠もったが、国人の多くが降参し、満祐から離れていった。九月十日、山名勢による総攻撃がおこなわれ、城山城が陥落した。満祐父子以下は自害し、ここに赤松惣領家は滅亡したのである（『建内記』嘉吉元年九月五日・八日・十二日条ほか）。

播磨東三郡の支配

閏（うるう）九月、乱の論功行賞がおこなわれ、赤松満祐の分国三カ国の守護職は、播磨が山名持豊、備前は山名教之、美作は山名常勝に与えられた（『斎藤基恒日記』嘉吉元年閏九月条）。これにより、山名氏は一族で九カ国の守護職を保持するようになり、幕府内での地位をさらに確固たるものにした。播磨には翌十月、守護代三名が入部し、郡ごとに郡代が配置され、山名氏による支配が始まった（『建内記』嘉吉元年十月二十八日条）。

ただし、持豊は播磨の全域を獲得したのではない。東部の明石（あかし）・三木（みき）（美嚢（みなぎ））・賀東（かとう）の三郡は将軍家御料所とされ、赤松満政が代官に任じられた（『室町幕府関係引付史料の研究』「室町将軍御内書并奉書留」ほか）。満政は、十一月に三木郡法光寺（加東市）の寺領を安堵しており（『県史』二「法光寺文書」一六）、満政による三郡支配が始まっていることが知られる。

満政が拝領した三郡は、摂津、丹波に接し、京都と播磨を結ぶ街道が通る枢要の地である。満政への三郡給付は、恩賞であるとともに、強大化する山名氏に対する牽制としての意味合いが強い。当然、持豊は不満であった。持豊は、満政の不忠を言い立て、幕府に対し三郡の給付を強請した。その結果、文安元年（一四四四）正月、東三郡は持豊に与えられることとなった（『建内記』正月二十六日条）。

同年三月、持豊は東三郡に使いを派遣し、寺社本所領の田数や年貢・諸公事の員数、本所直務の実否、元赤松氏の被官でまだ山名氏に下っていない者の名主職などに関する詳細な調査を実施している（同上文安元年四月十四日条）。東三郡に限らず、播磨は山名氏にとって一種の占領地であった。つぎにみるように赤松一族の挙兵もあり、その支配はいきおい軍事的、強圧的色彩の強いものとならざるをえない。山名氏の播磨支配により、寺社本所による荘園支配は大きく後退することとなる。

三木郡では、山名持豊が守護職を獲得したのち、嫡子教豊が支配を担当した。教豊の下に斎藤若狭守なるものがおり、ついで田原道円がそれに代わった（高田星司「播磨守護山名氏の分郡支配について」）。斎藤や田原は三木郡の郡代であろう。文安三年十月、教豊は石峯寺（北区淡河町）に対し、祈願寺として堂舎の再興と祈禱を命じ、当知行の地を安堵した（『県史』二「石峯寺文書」二〇）。それをうけた田原道円の奉書では、さらに勤行以外の寺役免除と寺領に対し不法を働く者の処罰を保証している（同上二一）。これをみるかぎり、石峯寺は、山名氏からも保護されていたようである。

赤松満政の乱と有馬郡

山名持豊の強請によって三郡を失った満政は、文安元年（一四四四）十月、子息三郎や赤松則尚らとともに播磨に下り挙兵した（『康富記』十月二十六日条）。則尚は赤松満祐の甥で、満

祐に従いながらも城山城で生き残った赤松一族の一人である。

翌月、山名持豊以下が赤松満政を討伐するため京都を進発し、十二月から翌年二月にかけて、播磨で満政軍と山名軍の合戦が行われた（『師郷記』文安元年十一月二十八日・十二月・同二年二月十四日条ほか）。満政は播磨での戦いに敗れ、摂津国有馬郡に逃れた。有馬郡守護有馬教実は当初満政に味方したが、三月下旬に丹波勢（細川軍）と戦って三七〇人が討たれるという大敗を喫した。そこで教実は幕府方に転じ、満政を討った。満政父子や若党らの頸は一二四と伝えられる（『上郡町史』第三巻「東寺執行日記」文安二年三月二十四日・四月四日条ほか）。宝徳四年（一四五二）に記された『温泉行記』によれば、生瀬で武庫川を有馬郡側に渡ったあたりが満政父子自害の地であり、供養のため律寺に十三重の小塔が建てられていたという。

有馬郡における戦いは、郡内やその周辺の寺院にも被害をもたらした。蓮花寺（三田市）では、山名軍の軍事行動による混乱のなかで、両界曼荼羅を失ってしまった。その後、文安五年にいたってようやく探し出し、再び寺に納めることができたという（蓮花寺所蔵両界曼荼羅図裏書（『県史』四「寺社縁起類」（付奥書等）一））。また、温泉寺では、乱入した賊のため、閻魔王の指示によって尊恵が如法堂の下に埋めたと伝えられる金函経が暴かれるという事態も起こっている（『温泉行記』）。

赤松則尚の播磨進攻と有馬元家

享徳三年（一四五四）十一月、赤松則尚が京都を発ち、播磨に向かった（『師郷記』享徳三年十一月四日条ほか。以下、馬田綾子「赤松則尚の挙兵」参照）。則尚は赤松満政の乱でも生き残り、一時姿を隠していたが、文安五年（一四四八）には阿波守護家の細川持常や政所執事伊勢貞国の支援により、播磨守護職返付の内諾をえていた（『経覚私要鈔』十二月十二日条）。しかし、返付は播磨守護職

をもつ山名持豊の反対により実現しないままであった。それが、この年になって持豊の意向を押さえ込む形で決着がはかられ、則尚が播磨に下向したのである。播磨では山名方との合戦も行われたが、則尚は現地でも京都でも事実上の守護とみなされていた。

則尚をめぐる一連の動きには、有馬郡守護有馬元家が関与していたらしい（家永遵嗣「『三魔』―足利義政初期における将軍近臣の動向―」）。則尚の軍勢に、元家の弟豊則と子息右馬助（うまのすけ）が加わっているのである（『斎藤基恒日記』享徳四年五月十二日条、『師郷記』同年同月同日条）。本節2項で述べたように、元家は将軍足利義政の寵臣であった。元家が政治を壟断する「三魔」の一人として批判されたのは、ちょうど則尚が播磨支配を進めていた享徳四年（一四五五）正月のことである。このような元家の立場と、子弟二人を参戦させた積極的な姿勢からみて、幕府内部の合意形成にも元家が深く関わっていたと考えられているのである。

しかし、同年四月になると、幕府内部の状況に大きな変化が起こる。四月下旬、幕府の承認のもと、山名教豊が則尚の討伐を目的として京都を進発した（『斎藤基恒日記』四月二十八日条など）。則尚を支持し、教豊の下向を阻止しようとした細川成之（しげゆき）（持常猶子）の行動は、将軍義政夫妻によって押しとどめられた（『師郷記』四月二十七日条）。それまで則尚を擁護していた義政が態度を転換したのである。この変化には、前年に山名持豊を支持した管領細川勝元の関与が推測されている。

翌閏四月から五月初旬にかけて、播磨で山名方と赤松方の合戦が行われた。幕府の方針転換により正当性を失った則尚は、国人にも離反され、五月十二日、備前カラツ島で自害した。有馬元家の子弟もともに果てた（同上五月十二日条など）。則尚は、伊勢貞国・細川持常・成之グループと山名持豊の対立、あるいは持常・

成之と勝元との細川氏内部における立場の相違といった諸勢力の対抗関係のなかで播磨守護職を回復しかけ、その力関係の変化によって滅亡に追い込まれたのである。一連の動きに深く関与したと思われる有馬元家も、前述のようにこの年十二月、遁世を余儀なくされることとなる。

赤松惣領家の再興　このように、二度にわたる赤松氏による播磨回復運動は失敗におわった。則尚の滅亡から二年後の長禄元年（一四五七）、赤松牢人は、吉野山（奈良県）を拠点とする後南朝（南北朝合体後に南朝の回復を求めて活動する勢力）に奪われていた神璽の奪還をこころみた（『県史』九「上月文書」四六など）。結果的に成功はしなかったが、神璽は翌年大和の国人によって奪い返され、京都に帰った（『大乗院寺社雑事記』長禄二年八月晦日条など）。

これに先立ち、将軍足利義政は、神璽奪還を条件として赤松牢人に惣領家の再興を約束していた。神璽回復は赤松牢人のみの手柄ではなかったが、義政は約束を守り、再興を許した。こうして、長禄二年十一月、赤松次郎法師丸（政則）が惣領家当主として初めて幕府に出仕した（『蔭涼軒日録』十一月十九日条）。次郎法師丸は、赤松満祐の弟義雅の孫である。次郎法師丸には、加賀半国の守護職などが与えられた（「赤松再興記」『群書類従』など）。赤松惣領家が播磨以下旧三カ国を回復するのは、応仁・文明の乱においてである。

4　応仁・文明の乱と摂津

応仁・文明の乱の始まり

強権を振るった将軍足利義教が、嘉吉の乱で横死を遂げたことは、将軍の権威を大きく失墜させた。八歳で跡を継いだ義勝（義教子）は、嘉吉三年（一四四三）に急死した。その後嗣となった三春（義勝弟。後の義政）も八歳であり、将軍として政務の主導権を握るのは康正元年（一四五五）から長禄元年（一四五七）頃のこととされる。親裁を開始した義政は、将軍権力の回復をはかるものの、結局挫折し、将軍の求心力は著しく衰えた。このような事実上の将軍不在や権威低下のもと、幕府内では細川・畠山両管領家が対立し、畠山氏の分裂後は細川勝元と山名持豊の対立が顕著となっていく。大名家では畠山氏のほかにも斯波氏などで家督争いが激化し、将軍家でも義政が弟義視を後嗣と定めたあとに実子（義尚）が誕生したため、後継者をめぐり分裂の要因を抱え込むことになった。こうした関係が相互に関連しあいながら大名間の系列化が進行し、勝元と持豊を首領とする二つの陣営が形成されてくるのである（川岡勉『室町幕府と守護権力』）。

写真102　足利義政像（東京国立博物館蔵）

文正二年（一四六七、三月、応仁に改元）正月、京都上御霊社で、家督をめぐって抗争を繰り返していた畠山義就と畠山政長が戦い、山名氏の支援をうけた義就が勝利した。細川勝元はひそかに戦備を整え、

一族や細川派の守護らの軍勢を京都に集めた。こうして、五月二十六日、京都で細川勝元方（東軍）と山名持豊方（西軍）との本格的な合戦が開始された。応仁・文明の乱の始まりである（以下の合戦の経緯については、『本庄村史　歴史編』参照）。

これに先だって、摂津の国人である池田氏が、馬上一二騎、野武士千人ばかりを引き連れて上洛していた（『後法興院記』応仁元年五月十六日条）。また、「応仁記」（『群書類従』）には、五月二十六日の合戦に、三宅、吹田、茨木、芥川や「摂州衆」の名がみえている。摂津の国人衆は守護である細川勝元の動員に応じて上洛し、東軍兵力の一翼を担っていたのである（熱田公「摂津国人と応仁の乱」）。

赤松氏の播磨回復

赤松惣領家の当主赤松政則も細川勝元方であった。応仁元年（一四六七）五月、京都での開戦に先だって赤松勢が播磨に乱入し、中旬には制圧に成功した。赤松氏には細川氏の合力があった。赤松氏の旧分国をめぐる赤松・山名の関係は、東西両陣営の対立構図の一要素であり、勝元は赤松氏を支援して山名氏の勢力を削ごうとしたのである。その意味で、赤松勢の播磨進攻は応仁・文明の乱の前哨戦であった。人びとは播磨制圧の知らせを聞き、山名持豊はどうするであろうか、天下の大乱になるのではないか、と憂慮した（『大乗院寺社雑事記』五月二十一日条）。その不安は的中したわけである。

このとき播磨回復の中心となって活躍したのは、赤松政秀であった。政秀は則祐六世の孫というが（赤松政秀寿像賛「翠竹真如集」）、系譜は定かではない。同年十一月、政秀は石峯寺（北区淡河町）に対し兵粮米・諸公事などを免除している（『県史』二「石峯寺文書」二四）。また、同じ頃、大部荘（小野市）の年貢・諸公事について領主である東大寺に書状を送っており（『県史』五「東大寺文書」三〇〇）、東播磨が政秀の支配下に

入っていたことがわかる。政秀は、この後塩屋城（たつの市）を拠点として播磨守護代を勤めることになる。

赤松氏による旧分国への進攻は備前、美作でも行われ、文明元年（一四六九）十月までに旧三カ国を安堵された（『大乗院寺社雑事記』十月二十六日条）。こうして、赤松惣領家は真の意味での再興を遂げたのである。

この間、応仁二年十一月、赤松氏庶流の有馬元家が惣領家の家督獲得を望んで足利義視に接近し、義政の命を受けた政則によって誅殺されるという事件が起こった（本節2項参照）。大乱のなかで赤松氏でも惣領職をめぐる争いが起こり、政則の地位がおびやかされたわけである。事件後元家の跡をついだ則秀は東軍に属し、政則の指揮下で活動している（『県史』九「上月文書」三六八）。

大内政弘の上洛と摂津の国人

応仁元年（一四六七）七月、周防・長門等四カ国の守護大内政弘が、西軍方として畿内の戦線に登場した。政弘は、同月二十日、分国など七カ国の軍勢に伊予の河野通春勢を加え、先陣だけで五〇〇艘という大軍を率いて兵庫津に上陸した（「大乗院日記目録」七月二十日条、『経覚私要鈔』七月三日・十九日条）。

八月三日、大内軍は兵庫を進発し（「大乗院日記目録」八月三日条）、この日は本庄山（東灘区）で、翌日には越水（西宮市）で東軍と戦った（『県史』九「三浦家文書」一）。七日には尼崎をことごとく焼払い（「東大寺法華堂要録」）、十日には難波・水堂（尼崎市）で東軍を破り（『萩藩閥閲録』巻八二・末武与五郎・四）、八月二十三日頃京都に入った。大内勢の到着によって西軍は一挙に態勢をたてなおし、以後両軍は京都で合戦を繰り返すことになる。この間、細川勝元は、池田氏ら摂津国人や赤松政則勢、細川持久（和泉半国守護）、内衆の秋庭元明らを摂津に派遣したが、大内勢の上洛を阻止できなかったのである（『後法興院記』八月二十四日条）。こ

の後、摂津では大内勢が優勢となる。

摂津から東軍勢力が後退した要因の一つに、摂津国人の離反があった。大内軍が京都をめざして進軍していたとき、池田氏は大内方に内通したといわれている（同上応仁元年八月二十四日条）。また『東大寺法華堂要録』によれば、椋橋（豊中市・尼崎市）での合戦（同史料によると応仁元年のことらしい）では、池田・伊丹・芥川らの摂津国人が大内方につき、さらに秋庭元明までもが寝返ったため、唯一奮戦した赤松勢が惨敗を喫したという。

応仁二年正月、大内氏の援軍が兵庫津に上陸し（『経覚私要鈔』正月九日条）、下旬には摂津の諸郡を陥れた（『碧山日録』正月二十四日条）。翌文明元年（一四六九）六月にも、摂津・丹波に大内勢の攻勢が行われ（『大日本史料』八―一、三三頁）、このときも摂津国人三六人が細川勝元に背いて大内方に属した（『経覚私要鈔』文明元年六月十六日条）。もっとも、国人たちはその後一貫して大内方についていたのではない。池田氏は同年七月には再び東軍方に属しており、大内勢の攻撃をうけて再度降参を申し入れたものの、政弘に拒否されている（同上七月十五日条）。国人衆は情勢に応じて立場を変え、自家の保全をはかろうとしたのである（熱田公「摂津国人と応仁の乱」）。

兵庫津の焼亡

兵庫津は大内軍の上陸以後、西軍に占領されていた（以下、新城常三『中世水運史の研究』参照）。応仁二年（一四六八）九月、大内方は成身院光宣が兵庫南関を領知しているとの風聞を入手し、もし事実であれば光宣を追放して大内方が関務を行うとの決定をくだした。成身院光宣は大和の国人筒井氏の出身で、畠山氏の家督をめぐる争いでは早くから政長を支持し、応仁・文明の乱の初期に東軍方として活

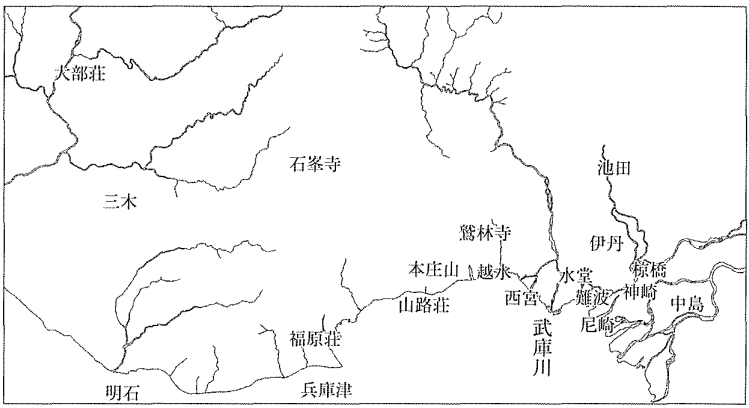


図67　応仁・文明の乱関係地図

躍した興福寺僧である（熱田公『中世寺領荘園と動乱期の社会』）。これに対して興福寺は、光宣は南関には無関係であると申したてた（『県史』五「東大寺文書」（摂津国兵庫関）三一四）。大内方はさらに糾明を進めた結果、光宣が関務に関与していないことを認め、味方の軍勢にたいし南関に干渉しないよう命令をくだした（『大和古文書拾聚英』一九七）。大内方には、南関の安全を保証することによって、興福寺を西軍方に引きつけておこうとする意図もあったのである。

文明元年十月十六日、東軍の山名是豊（これとよ）が、播磨から東上してきた赤松勢とともに兵庫津を攻撃した。是豊は山名持豊の子息であるが、一族中でただ一人東軍に参じていたのである。『応仁記』によれば、赤松勢には赤松政秀をはじめとして、宇野氏、小寺氏、明石氏らがおり、鷲林寺（西宮市）などに陣をとったという。

合戦の当初は大内勢が勝利をおさめたが、是豊は多勢を頼んで兵庫津に乱入し、同十八日、大内勢を破った。是豊は「兵庫本来住人」をことごとく断頭し、南北両関をはじめ、

寺院、在家は残らず焼失したという。このとき家領の福原荘（兵庫区）に下向し、兵庫津の福厳寺に滞在していた権大納言一条政房も、寺に乱入した東軍の兵の手にかかって落命した（『大乗院寺社雑事記』文明元年十月二十一日・十一月十一日条）。是豊はつづいて摂津中島（大阪市）の大内勢を攻めたが、十二月十九日、神崎城（尼崎市）の戦いに敗れ（『県史』九「三浦家文書」五ほか）、大内勢を摂津から掃討するにはいたらなかった。

是豊は兵庫における戦功により兵庫五カ荘を拝領した（『大乗院寺社雑事記』文明元年十一月十八日条）。兵庫五カ荘とは、兵庫上・中・下荘（兵庫区から長田区）と福原荘、輪田荘（兵庫区）をさすらしい。兵庫津を中心とする現在の西神戸一帯が東軍の勢力下に入ったわけである。同じ頃、九条家は幕府から輪田荘の直務を認められている（『九条家文書』三五九・三六〇）。東軍による支配回復を機に、家領の復興をめざしたのであろう（乱中の兵庫周辺の荘園をめぐる動向は本章第四節1項参照）。ちなみに、九条家の所領は領家職、是豊が与えられたのは地頭職である。その後、文明四年になって是豊の福原荘地頭職が将軍義政に没収された。是豊の代官は怒って兵庫を退いたというから（『大乗院寺社雑事記』文明四年九月十日条）、この頃までは是豊勢が一帯をおさえていたようである。

ところが、文明六年六月には、大内氏が興福寺に兵庫南関を安堵する文書を与えている（同上文明六年六月二十七日条）。もっとも、現実には興福寺が南関を支配することはできず、大乱中は有名無実の状態であった（『多聞院日記』文明十年二月二十七日条）。また、翌文明七年二月には、興福寺の講会の費用にあてる山路荘（東灘区）の年貢を大内氏が押領したため、講会が中止となっている。さらに、三月には福原荘に大内氏の代

官がおかれていたこともわかる（『大乗院寺社雑事記』文明七年二月十二日・三月一日条）。したがって、すくなくとも文明六年以降は、一帯を再び大内氏が支配していたと思われる。

大乱の終結

東西両軍の戦闘は、開戦以来畿内から周辺諸国に広がり、西は遠く九州にも及んだ。こうしたなか、文明四年（一四七二）には和議に向けた動きが始まった。翌五年、三月に山名持豊、五月に細川勝元が死去した。持豊は前年のうちに家督を孫政豊に譲っていた。勝元の跡は子息政元が継いだ。十二月には将軍職も義政から義尚に譲られた。このような情勢を受けて和議の動きが進み、文明六年四月、細川政元と山名政豊の和議が成立し、山名氏の幕府帰参が実現した（『大乗院寺社雑事記』文明六年四月八日・十八日条ほか）。

しかし、畠山義就、大内政弘らは和睦にしたがわず、なお東軍との対決姿勢を維持した。その政弘も、九月には中国・九州方面の情勢を憂慮し本国周防に帰ることを考え始めたが、政弘の幕府帰参は許されなかった（同上九月十九日条）。その後、文明九年六月、細川政元の内衆薬師寺与一の弟が三〇〇ばかりの兵を率いて山路荘に打ち入り、大内勢は敗れて中島に撤退するという出来事があった。この結果、湯山（有馬温泉）あたりから六、七里の間はことごとく細川方になったという（同上文明九年六月六日条）。大内軍の摂津駐留と神戸市域の支配はなお続いていたのである。

この年九月、畠山義就が京都の陣を引き払って河内に下向し、十一月には大内政弘ら西軍の諸大名がいっせいに帰国した。ここに十年に及ぶ大乱はひとまず終結し、大内氏による摂津支配も終わるのである。

乱後の動向

大乱中、寺社本所領では、戦乱に乗じた守護被官や国人らによる押領が進んだ。摂津は、紀伊・越中・和泉とともに「国中乱るるの間、年貢等の事是非に及ばざる」国の一つにあげられている（『大乗院寺社雑事記』文明九年十二月十日条）。

乱の終結をうけ、足利義政や守護細川政元は寺社本所領の還付にのりだした。興福寺では、文明十年二月に早くも兵庫南関の関銭収入を回復している（本章第三節5項参照）。また、年末には、山路荘以下摂津国内の春日社兼興福寺領に関し、守護代薬師寺元長が、押領者を排除して興福寺に引き渡すよう命じられている（同上文明十一年正月二日条）。しかし、こちらのほうは実現されなかったらしい。

摂津では、寺社本所領の還付に対する国人衆の反発が強かった。国人たちは一致して寺社本所への年貢納入停止を決定し、国人一揆を形成した（同上文明十一年閏九月八日条）。ただし、これは摂津の国人全体ではなく、茨木氏、吹田氏、三宅氏を中心とする摂津上郡（島上郡・島下郡）の国人による一揆であった（天野忠幸「戦国期畿内の流通構造と畿内政権」）。彼らは、一揆形成以前から畠山義就と結んで細川氏の支配に対抗しており、文明十年七月に細川政元が三宅氏を攻撃したときには、義就被官の遊佐氏や誉田氏の軍勢が淀川をはさんで細川軍と対峙したという（同上八月六日条）。京都を退去した義就は、河内を根拠として政長との闘争を続けていたのである。

文明十四年三月、義就の摂津進出に与同する国人を討伐するため、細川政元・畠山政長が摂津に出陣した。それは同時に、将軍による寺社本所領返還命令に従わない国人たちを制圧する目的もあわせもつものであった（『後法興院記』三月七日条、『長興宿祢記』三月八日条）。政元は、三月に三宅城を攻め落とし（『後法興院記』

三月十三日条)、閏七月には薬師寺元長が茨木氏を攻め、一族六、七人を自害に追い込んだ。このような情勢をうけ、政元に背いていた国人たちが侘びをいれ、自家の保全を願うという事態となった。さらに十月には、元長の攻撃をうけ吹田氏が没落した(『大乗院寺社雑事記』閏七月十二日・八月二日・十月十六日)。こうして国人衆の結束は崩れた。これらの諸氏は、この後ふたたび細川氏の被官として軍事力の一端を担うようになる(森田恭二「守護細川氏と北摂津の国人」)。

摂津国寺社本所領の書上げ　この頃の幕府による寺社本所領復興政策に関連する史料として摂津国社領并人給分等注文と摂津国寺社本所領并奉公方知行注文(『県史』九「蜷川家文書」九・一〇)がある。これらは、幕府が回復すべき所領の現況を書き記すために作成したと考えられる文書である。前者には、石清水八幡宮領、春日社兼興福寺領、鴨社領、北野社領と赤松葉山三郎、武藤孫次郎、安東平右衛門尉(いずれも将軍側近)の知行地が書き上げられている。神戸市域関係では春日社兼興福寺領の山路加納荘(東灘区)、赤松葉山の都賀荘(灘区)、武藤の徳井時枝(荘)(灘区)がある。これらを含め列挙された所領はすべて不知行、つまり本来の領主による支配ができていない状態である。

後者には、京都の五山系の禅院を中心とした寺社と公家領などが書き上げられている。市域に関係するところでは、相国寺富春軒領の都賀荘下司公文名・摩耶山(忉利山天上寺)別当職・宝泉寺(灘区)領田畠、伏見大光明寺領葺屋荘(中央区)、南禅寺雙桂庵領兵庫上荘末弘名田畠、一条家領福原荘、九条家領輪田荘(以上、兵庫区)、烏丸家領菟原荘(不明)武春名等、高師為知行分井戸荘内須磨関(須磨区)、竹藤親清知行分生田社職の名がみえる。これらのほとんどが不知行か、年貢難渋、違乱ありなどとされている。全体をみ

ても当知行は少ない。このなかには大乱以前からの不知行地も存在するであろうし、ほかにも寺社本所領はあるが、大乱終結後における所領回復の困難さを窺い知るには十分である。

将軍権力の分裂　応仁・文明の乱のさなかに将軍職を継いだ足利義尚は、長享元年（一四八七）九月、幕府の命に従わず、寺社本所領の押領を続ける近江守護六角高頼を討つため近江に出陣し、延徳元年（一四八九）三月、陣中で病死した。父義政も翌年正月に他界し、七月になって足利義材（義尹・義稙）が将軍職についた。義材は、義政によって一時は将軍の座を約束された義視の嫡子である。

義材は、将軍としての自らの権威を高めるべく、延徳三年八月、義尚の遺志をついで近江に出陣し、ついで、翌年二月、畠山政長の要請をうけ、政長の宿敵である義就（すでに死亡）の嫡子基家を討つため河内に出陣した。その河内在陣中の四月、細川政元が突如足利義澄（義政弟政知の子息）を新将軍に擁立した。この背景には、幕府内における義材と政元、政元と政長の対立があった。政元は日野富子、政所執事伊勢貞宗らの支持をえてこの行動にでたのである。諸大名らもこれに従い、義材は将軍の座を追われることとなった。これを明応の政変という。その後、義材は京都を脱出し、再起を期すことになる。この結果、将軍権力は二つに分裂し、畿内における細川氏の優位が確立した。以後、将軍は細川氏によって廃立さ

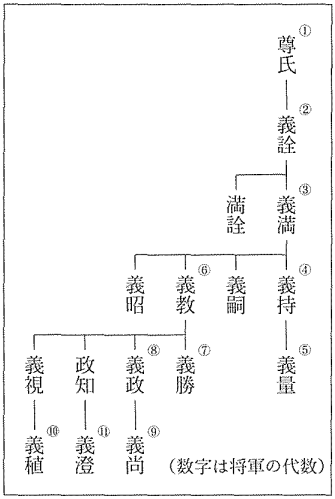


図68　足利将軍家略系図

れることになる。近年は、この明応の政変をもって戦国時代の始まりとみなす考え方が優勢となっている。